

はこだてと 外国人居留地

はこだて外国人居留地研究会(代表:岸甫一)
平成26(2014)年3月31日発行
平成24年度「公益信託函館色彩まちづくり基金」助成事業

人物編 一官から商人の街へ一

編集長 清水憲朔・大西剛
編集委員 岸甫一・中嶋肇・犬島康文・遠藤浩司・岡田弘子・倉田有佳・酒井嘉子・佐藤稔・田村和子・千葉敬・土田秀樹・星野裕・三上浩司・三国谷新一
執筆協力 小原雅夫・保科智治
資料協力 田原良信・“箱館写真”の会・函館市中央図書館・函館文化会・北海道アイヌ協会函館支部・函館フォトアーカイブス
図版提供 記載のないものは函館市中央図書館

図版は不許複製

〈目次〉は巻末にあります

函館は、江戸時代に2度幕府の直轄地となり、箱館戦争終結後は開拓使の主導で近代都市としての基盤が整備されました。北海道開発の拠点港として街の規模は拡大し、明治後期からは北洋漁業の基地として大発展を遂げます。「人物編」と題した本編では、この新天地にチャンスを求め、全国・世界から函館に渡り活躍したニューカマーたちに焦点をあてました。今、函館は高速道路と鉄道網、航空路線の全地球的ネットの形成、世界中からの大型「遊歴船」(観光船)の大量入港などによる交通のグローバル化の中で、安政期に次ぐ「第二の開国」を迎えています。〔清水〕

1. 箱館開港と蝦夷地開拓。激動の時代を乗り越えた先人たち

※文中の丸数字は本編の原稿番号に対応しています

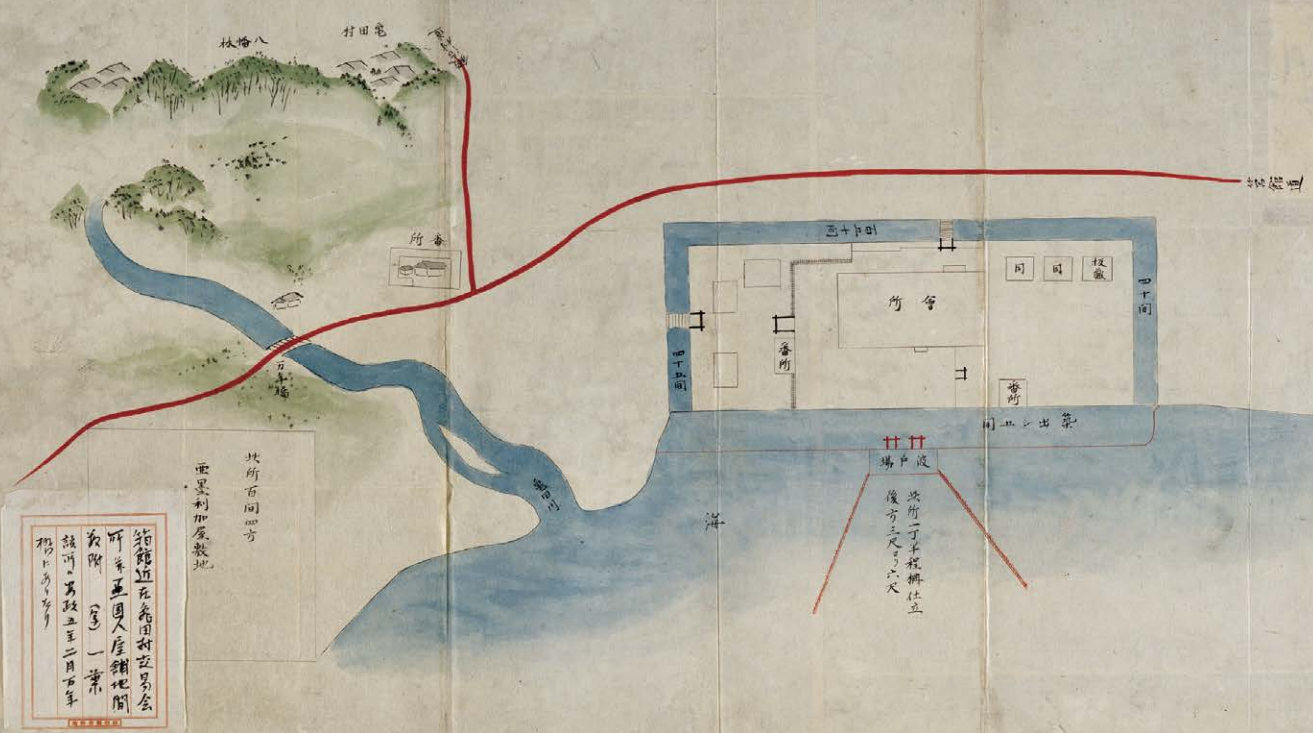
松前藩領であった蝦夷地の周辺に18世紀の末頃から外国船の出没がみられた。享和2年(1802)江戸幕府は蝦夷地奉行を置き直轄地とする。しかしロシアとの緊張関係が緩和された文政4年(1821)に松前藩に復領された。安政元年(1854)ロシアやアメリカの開港要求に幕府は松前周辺を除く箱館・蝦夷地を再び直轄地にしていく。

徳川政権倒壊後に起きた戊辰戦争は箱館を最後の戦場とし明治2年(1869)5月に終結を迎えた。旧幕府軍榎本武揚らの蝦夷地開拓の嘆願は拒絶されるが、新政府の目を蝦夷地に向けさせることになった。

明治2年7月開拓使が設置され函館は北

海道開拓の拠点港となる。明治11年・12年連年の大火を開拓使は懸案であった街の不燃化の好機として街路の整理を断行する。現在も見られる二十間坂以西の街区は当時からのものである。明治15年2月開拓使は廃止されるが、銀行と海運業、海産物や舶来品を扱う企業の勃興がみられた。北海道開拓の交通の拠点となり、全国から人・物・金が入り出す商港としての機能も拡大を続ける。

通信・水道・港湾・電気などのインフラも整備された函館は、日露戦争勝利以降、北洋漁業の基地の町として発展を続け、昭和初めに絶頂期を迎える。



箱館近郊亀田の交易会所とアメリカ人居留地計画図（安政5年2月） 安政4年（1857）から5年にかけて幕府は、旧亀田川河口に外国人居留地（3.3万m²）と交易会所（2万m²）を設け、亀田一帯で貿易都市・新箱館の建設を計画した。河口から2km余り内陸に新御役所（五稜郭）が設置され、弁天台場の築造や箱館産物会所の全国設置が進められ、交易会所の貿易に全国諸大名の国産品の出荷も見込まれていた。箱館奉行村垣範正『公務日記』には江戸の老中の指令等御用状が逐一記され、日本の開国過程を教えてくれる。本文⑤⑥

前幕領期の人々

文化2年（1805）ロシアのレザノフが11年前のラックスマンの信牌（^{しんぱい}許可証）を持ち通商を求め長崎に来航した。通商を拒絶するなど幕府の非友好的対応に失意のレザノフは帰路病没する。その後、部下達によるカラフト・エトロフ襲撃事件が起こる。幕府は測量中のロシア軍艦の艦長ゴロヴニンを幽閉するが報復として高田屋嘉兵衛が連行される①。高田屋と副官リコルドの話し合いで事件は和解に向かいゴロヴニンは釈放される③。その時代に全国をまたに活躍した人物に工業松右衛門がいる。彼はエトロフ・箱館で埠頭や造船所を造りまた新巻鮭を考案するなど異能の人であった②。

開港と箱館奉行の仕事

安政元年（1854）、各国との和親条約による開港と蝦夷地経営のため箱館奉行が再置された。箱館奉行は箱館山裾の市中と近郊の

^{おやす}38か村、小安から野田追（現八雲）の「六ヶ場所」の漁村を直接管理し、同時に北檜山から宗谷岬・知床岬先端までの西蝦夷地、知床岬から千島諸島、八雲までの東蝦夷地と北緯50度以南の北蝦夷地・カラフトという広い地域を支配地とした。

奉行の役務は開港場箱館の外国人の管理はじめ物産振興、場所（漁場）請負人と東蝦夷地出入の人・物からの沖ノ口役所での徴税、そして先住民族アイヌの巡回撫育と蝦夷地開発のための定住化政策と広域かつ多岐にわたり、幕吏の中でもとりわけ優秀な人材が登用された④。なお開港当時全蝦夷地のアイヌの人口は1.8万人前後だったが、幕府・明治政府の政策により箱館・函館にアイヌは「不在」とされた⑦。

箱館と近郊を南部・津軽・松前の各藩に、東蝦夷地・千島を仙台藩に、西蝦夷地と北蝦夷地カラフトを秋田藩に警備させるといふ防備体制も固められる。一方ペリー艦隊来航時

の箱館の様子や奉行所の対応を、町名主の眼で描いた貴重な記録も残されている⑨。

貿易港となる箱館

徳川幕府は安政3年(1856)7月イギリス貿易使節の日本訪問の予告に貿易問題を俎上にあげた。当時蝦夷地では東蝦夷地の三官寺のほかには寺院の建立が禁じられていたが幕府直轄地となり仏教の布教が図られる⑩。

箱館奉行の発案で出来た武田斐三郎を教授役とする諸術調所は、全国の有志の若者を箱館に惹き付けた。開設期間は短かったが、新しい日本を担う人材を数多く輩出する⑪。

安政4年(1857)春イギリスが広東の町を焼き払うというアロー戦争のニュースが幕府に伝えられる。出島のオランダ領事官はこの戦争の責任を清国の南京条約の不履行に帰し、幕府のアメリカの対応に忠告を与えた。

幕府は欧米諸国の軍事力をバックにした自由貿易の強要に対し、ついに通商開港を決断

する。貿易の利益に着目すると同時に、国防力の強化を図るが、異文化の流入によるインパクトを最小限に抑えるために漸進的な開国プログラムをたてる。長崎と箱館、そして下田代替の新港で交易会所による段階的な貿易開港が図られる⑫・図版左上。

「異国文化」の対立と交流

日露追加条約で通商の港として下田が閉ざされることになったため、ロシア本国は最初の領事を箱館に派遣する。安政5年(1858)12月に「異教の祭り」ヨルカ祭でクリスマス・ツリーが仮ロシア領事館の実行寺の近くに立てられる⑬。

一方、安政6年(1859)の「自由貿易」開港後渡来したイギリス商人ポーターは酔った役人と争い居住地問題で公使までが手を焼くトラブル続きの商人であった。彼は日本人女性を最初の妻に迎えた外国商人で、3人の子供がいた⑭。
〔清水〕



文久元年(1861)の箱館市中絵図には、箱館丸とロシア軍艦が描かれている。ロシア領事ゴシケヴィッチはこの年の2月10日、箱館奉行勝田充行らから託された書簡をもち軍艦ナイエステク号で品川に入港。書簡には「イギリスが対馬を狙っている」とあった。ロシア海軍が対馬を半年余り占領したポサドニック号事件の始まりである。赤羽根接遇所で外国奉行村垣範正らと会談したゴシケヴィッチは「対馬の件で清国と同様の条約を結ぶ事」など3件を要求する。ロシアは戦略上、中国沿海地域(プリモリーエ)を重要視し日本と韓国の間にある対馬を支配するため既に極秘で上陸していた。本文④(図版五島軒提供)

1 前幕領期の箱館における高田屋の活躍

修業の頃から実力者の片鱗

父弥吉、母くりの男6人兄弟の長男として淡路国（阿波徳島）津名郡都志本村（現兵庫県洲本市五色町都志）に生まれる。父は病弱で、田畑もほとんど人手に渡り大変な生活であった。

そういう逆境の中でも、7歳の頃、地元の医師から読み書きを習い、13歳で家を出てからは、同地の親戚弥右衛門から漁と航海術の手解きを受ける。母の妹の夫にあたる和田屋喜十郎方で雑貨商を手伝い、21歳にして兵庫の廻船業堺屋喜兵衛（和田の弟）方の水主となる。寛政4年(1792)に「ふさ」と結婚、24歳の若さで兵庫西出町に店を開き、下関・長崎にまで商売を広げるようになる。

この頃、刺激を受けたのが毎年春秋の2回、瀬戸内海から日本海を回って蝦夷地の産物を積んでくる北前船の雄姿であった。27歳の時、兵庫の和泉屋伊兵衛の沖船頭として、初めて酒田まで航海した。

高田屋の雄飛

寛政8年（1796）、28歳の時に当時日本で最大級の1500石積の辰悦丸を新造した。これに酒や塩、木綿類を積み、酒田では米を積んで箱館に向かった。既得権者の力が強い松前や江差を避け箱館に賭けたのである。この時、高田屋の屋号を公称する。

箱館では廻船問屋・白鳥勝右衛門方に止宿した。荷を売り捌くと、鮭、鱒、昆布を買い付け、帰りの船に積み込んだ。これ以後、箱館との往復を重ね、大町に支店（のち本店）を出したのが30歳のときである。

寛政11年、幕府の「エトロフ島海路試乗船頭」募集に応募し、採用される。幕臣近藤守重（重蔵）とクナシリ水道の潮筋を調べ、エトロフ島間の航路を拓く。寛政12年、近藤に従い辰悦丸以下5艘の手船を出し、エトロフ西海岸に17ヶ所の漁場を開く。享和元年（1801）幕府から蝦夷地定雇船頭を命ぜられ苗字帯刀も許される。

この年、幌泉（現えりも町）を請負場所とするとともに（後に根室も請負場所とする）、官許を得て箱館恵比須町（現宝来町）の湿地を埋め立て、その一角に敷地5万坪の屋敷を建てる。

公共のための尽力

箱館や亀田に、摂津池田から松、杉を取り寄せ植林し、淡路、兵庫からハマグリ、シジミ、コイ、フナ、ウナギ等を取り寄せ養殖した。また幕府が造った築島の接続地825坪を埋め立てて船作事場を設けたほか、箱館奉行の食糧自給政策に協力し、大坂、淡路から農民数十戸を移住させ開墾に当たらせた。



辰悦丸の模型（箱館高田屋嘉兵衛資料館）



亀石は後に3分割され、己巳役(きしのえき)海軍戦死碑(船見町)などに使用された

文化3年(1806)の大火時には、自店が焼失したにもかかわらず、私財を投じ被災者を救い、大坂から職人を呼んで市中9ヶ所に井戸を掘らせた。このほか敷地に備蓄米の蔵9戸を建てて飢饉に備えた。

嘉兵衛の跡を継いだ三弟金兵衛も、凶漁の年に尻沢辺(現住吉町)の海中から3丈ほどの巨石(約9m、亀石と呼ばれた)を地元のみならず茅部や下海岸の男女、子供にまで、給金と食料を与えて引き揚げさせるという失業対策を行っている。このように高田屋は当時破格の豪商であり、その地位や名声は不動のものとなっていた。

ゴロヴニン事件と嘉兵衛の偉業

寛政12年(1792)9月、ロシア使節ラックスマンが通商を求め、漂流民の大黒屋光太夫、磯吉を連れて根室に現れた。翌年も箱館に来た後、陸路を通り松前で幕府役人と会見し、再度通商を求めたが、窓口は長崎のみであるからと「信牌」(長崎への入港許可証)を与えられたに過ぎず、一旦帰国した。

それから11年後の文化2年(1805)レザノフが長崎に来て交易を求めるが、半年も待たされた上に拒否され、信牌も取り上げられたため、レザノフは失意のうちに帰国の途についた。

文化3年から4年にかけて、フォボストフらがカラフト、エトロフ、利尻に来て略奪暴行事件を起こしたため、日本側にはロシアに対する険悪な感情が増していた。文化8年6月、千島列島を調査測量中だったロシアの軍艦ディアナ号がクナシリに来航。日本の守備隊に艦長ゴロヴニンら8名が捕らえられ、箱館に送られた後、松前に監禁された。怒ったロシア側は文化9年、クナシリ沖で嘉兵衛ら6人を捕らえ、カムチャツカに連行した。

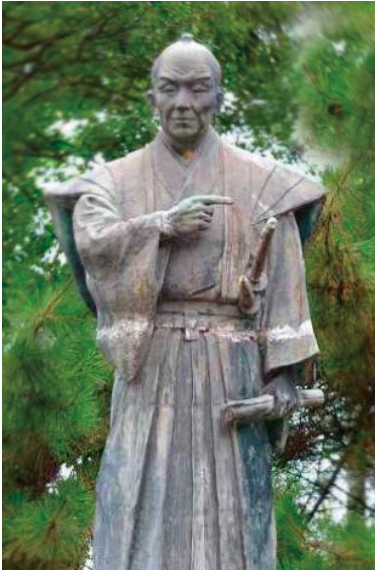
嘉兵衛がロシアの非を堂々と論じ、日本に謝罪するよう主張すると、ロシア側もこれを受け、文化10年クナシリ会所で嘉兵衛に幕吏と折衝させ、ゴロヴニンを無事帰国させることができた。副艦長のリコルドは嘉兵衛を聡明で教養のある立派な人物と評価している。

余生、郷里に

文政元年(1818)、経営の一切を金兵衛に任せ、病気養生のため都志に帰る。郷里でも築港や港の改修に資金を出し、寺社に寄進を続けるなど、最期まで富を社会に還元し、偉大な人生を終えた。〔佐藤〕

【参考】高田屋嘉兵衛翁伝、高田屋嘉兵衛(北海道総務部北方領土対策本部)、高田屋嘉兵衛(黒部亭)、史伝高田屋嘉兵衛(中川清治)、高田屋嘉兵衛(須藤隆仙)

2 海洋技術のマルチタレント くらくまつ えもん 工楽松右衛門



工楽松右衛門像(兵庫県・高砂神社)

工楽松右衛門(寛保3～文化9年＝1743-1812)は、「高砂やこの浦舟に帆を上げて…」の謡曲で有名な播州高砂(現兵庫県高砂市)の生まれであり、実家の宮本家は、代々直

(乗)船頭を家業とし、廻船業を営んでいた。

幼少から船に興味があったようで、15歳で家を飛び出し2年程経って兵庫佐比江さびえの諸国廻船問屋・御影屋平兵衛に奉公し、大変良くしてもらっていると実家に知らせている。ここに40歳頃まで奉公し御影屋の株を譲り受け回漕業として独立したようだ。

「松右衛帆」「織帆」の発明

当時の船は帆船が中心であったがむしろ筵帆は水に弱く、2、3枚重ね縫いした刺帆も手間の割には脆弱なものだった。そこで彼は丈夫な帆布が出来ないと長年研究を重ね、考えついたのが、太くて質の良い綿のたて経糸・よこ緯糸で製織した帆布であった。家船八幡丸で試用を重ね、天明5年(1785)、43歳頃に成功に至る。

播磨は木綿の主産地で、自らも生産工場を設けたが、事業を独占せず、むしろ積極

的にこの技術を人に教え、帆布工場を作ることを勧めた。販売も兵庫の豪商喜多風(のち北風家)の最初の別家として暖簾を受けた船具商喜多二平の喜多屋に依頼するなど、全国の船がこの帆布を使えば地場産業が振興し、なおかつ航行が安全でより速くなるだろうと思い実行に移した。

値段は刺帆の約2倍だったが、比類のない耐用年数と航行効率により短期間に普及し、北前航路の収益も飛躍的に向上した。

恵登呂府(択捉島)埠頭事業により 工楽姓を賜る

享和2年(1802)、エトロフ西北部紗那アリモイ(有萌)湾に埠頭を築造する際、幕府の指示を受けて、湾底に点在する巨岩を取り除く作業船を考案し、翌年完成する。

同年、エトロフ築港の功績により幕府から工楽姓を賜り、帯刀も許される。工楽は「工夫を楽しむ」の意味である。

箱館湊の築島と造船所

はぶとまさやす羽太正養(後の箱館奉行)が著した『休明光記』の享和元年の記述の中に「箱館湊には船の作業場がなく、修復する時必ず南部や津軽の地で行う。この事はなは甚だ不便であり、幕府は内濶町海岸を埋め立てて、船の作事場を設けた。同所に横堀を掘って橋を架け、栄国橋と名付けた」とある。

また蝦夷地探索に従事した幕吏・村上島之丞の『蝦夷島奇観』には、「享和3年内濶町の海岸から4丁余りの遠浅の所に、播州兵庫の船長松右衛門に命じて一嶋を築かせ、官倉を建てさせ、これを築島と言う」

とある。

文化元年（1804）、箱館奉行の築島1250坪が竣工し、ここに船たて場（造船所）が設けられる。高田屋もこれに隣接して埋立を行う。松右衛門はこの埋立地の船着場の権利を持っていたようで、文化9年、高田家に105両で売ったという証文がある。

高砂湊の改良と、鞆の石工への薫陶

文化5～8年、故郷の高砂川の浚渫を行い、碇泊を容易にする工事でも棟梁を仰せつかっている。

文化8～9年、備前福山（現広島県福山市）鞆の浦の防波堤工事において、松右衛門の下で働いた鞆の石工の中には、松右衛門から技術を習得し、後年山陰地方の築港の棟梁として招聘されるようになった人もいた（『福山市史』中巻）。

新巻鮭の考案

蝦夷地産の魚について、長期保存には乾燥や燻製の方法があるが、味が変わり、調理に手間がかかることから、各魚種とも塩蔵ものも多かった。ただし塩蔵にしても保存性が良いが塩辛過ぎる欠点があったし、甘塩とすれば、味は良いが持ちが悪かった。

そこで松右衛門が考え出したのが、甘塩のものを「早船」で市場へ届けるという方法で、これが現代も贈答などに用いられる新巻鮭の始まりである。

松右衛門は、帆布の開発から海洋土木の用具・技術の考案、流通の改良まで、さまざまな分野で革新をもたらした多才な人物であった。〔佐藤〕

【参考】みなとの偉人たち（中井修）、工楽家三世略傳（六世工楽松右衛門）、神山茂著作集第一集 - 築島と工楽松右衛門、工楽松右衛門略叙（松岡秀隆）



「高田屋旧蔵 箱館絵図」に描かれた築島（写真中央下）

3 箱館・沖の口番所のゴロヴニン釈放:陰の立役者荒尾但馬守

文化4年(1807)のロシア人による樺太・択捉の襲撃(フヴォストフ事件)の余波で、ロシア軍艦ディアナ号の艦長ゴロヴニンが文化8年千島で捕らえられ、松前で1年半の幽囚生活を送った。

翌年、同艦の副長リコルドが国後沖で偶然遭遇した高田屋の船を拿捕、船長の高田屋嘉兵衛をカムチャッカに連行した。嘉兵衛はリコルドとの間に厚い信頼関係を築きあげ、松前奉行との辛抱強い交渉の結果、ゴロヴニンの釈放が実現することとなった。文化10年9月26日、リコルドとゴロヴニンは箱館の沖の口番所で感動の再会を果たした。

寛政5年(1793)のラクスマン来航に始まるロシアからの通商要求が、日露双方が相手方の有力者を拉致するという重大な局面を克服してゴロヴニン釈放が平和的に達成できた背景にはリコルドや嘉兵衛の努力が大きかったことは史実に詳しい。

一方で、当時の松前奉行に荒尾但馬守しげあきら成章のような開明的な人物が居たことも大きかった。荒尾は尋問を通じて早くから事件の真相をよく理解し、ゴロヴニンの早期釈放を上申ししていたが、当初幕府上層部はこの上申を却下していた。

荒尾は文化9年6月江戸に帰参したが、「国法もって他国人を処罰すべきではなく、ロシア官憲とも折衝すべき」と引き続き事件の解決を粘り強く訴え続けた。荒尾の後任の松前奉行もゴロヴニンを厚遇し、釈放へ向けての準備を進めていた。

荒尾は松前奉行に着任した文化5年当時からロシアとの交易を進めるべきとの意見



ゴロヴニン像(北方歴史資料館)

を具申ししていた。実は、フヴォストフ事件後の幕閣が「外国船打ち払い」の一方でロシア側との和平も模索していたことに呼応するものではあったが、当時としては画期的なものである。当時の松前奉行の開明的な考え方がうかがわれる。

残念ながら、ゴロヴニン事件の勃発とその後のロシア側の消極姿勢への転換でロシアとの交易開始は遠のくことになった。ロシアは列強の中でもっとも早くから日本との通商を希望する使節を再三送り込んでいたにもかかわらず、結局嘉永7年(1854)砲艦外交で開国を迫った米国・ペリーに後れをとることになる。 [星野]

【参考】黒船前夜(渡辺京二・洋泉社)、日本幽囚記(ゴロヴニン・岩波文庫)

4 ロシア軍艦対馬侵攻事件と箱館領事ゴシケビッチ

文久元年（1861）2月3日、ロシア軍艦ポサドニック号が九州と朝鮮半島の間位置する対馬・浅茅湾に来航、艦艇の修理を口実に長期間碇泊・上陸した上、対馬藩に対して碇泊地周辺の租借を要求した。ロシア人によるこうした侵攻事件は、文化4年（1807）の樺太・択捉での襲撃・略奪（フヴォストフ事件）、嘉永6年（1853）、軍隊が樺太・クシュンコタンに上陸、松前藩の屯所近くに哨所を構築・越年した事件と並んで、1800年代のロシアの領土拡張策を象徴する出来事であった。その記憶がその後長く日本人の「対露不信」の原因となったとされる。

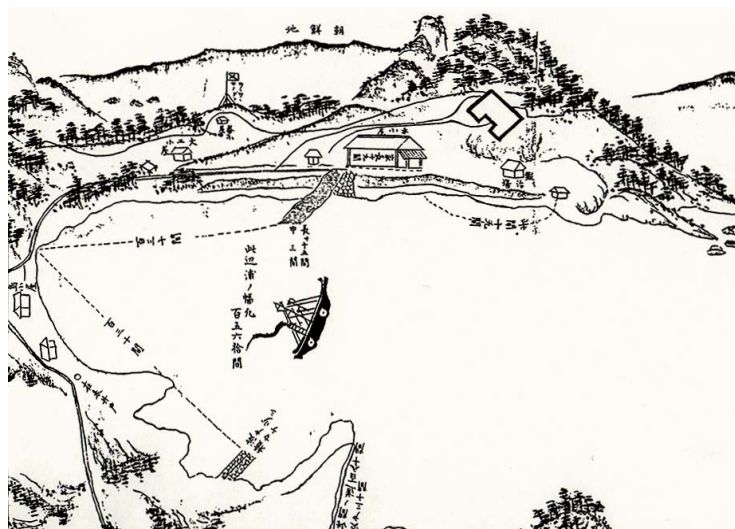
対馬では、時とともに露側と対馬藩兵や住民の衝突で死傷者が出るなど事態は深刻化、幕府は外国奉行を現地に派遣したが交渉は難航した。軍事力では対抗できないことを悟った幕府は、英国に支援を要請、英艦艇2隻が現地に急派され、ロシア側を威嚇、同年8月ロシア艦隊は6か月に及ぶ占拠を解いて退去した。従来はこの英国の介入が事件解決の切り札になったとされてきたが、実はこの裏で箱館駐在のロシア領事ゴシケビッチと箱館奉行村垣範正が頻繁に交渉を展開していた事実がある。

もともとロシア本国では、外務省と海軍の間に対日政策での意見の相違があり、事件は海軍側の独走によるものだった。国際紛争への発展を恐れた外務省側は早期解決を目論んでいたとされる。一方

英国も対馬の軍事的重要性に早くから着目、駐日英公使オールコックはかつて対馬占領を説く意見も具申しており、この事件をきっかけに日本側に貸しをつくるという思惑もあったようだ。

こうした複雑な利害関係が交錯する中で、ロシアの唯一人の外交代表であったゴシケビッチは本国外務省の意向をうけて、日本側の対露感情の悪化を最小限にとどめるべく、窓口となった村垣と精力的な折衝を行った。当時、ロシアとの間ではサハリンの国境画定交渉も進められていたが、この事件を通じて、幕府は以前にもまして国境問題の重要性を認識することになる。箱館におけるゴシケビッチ領事と村垣ら箱館奉行との関係も、従来にも増して緊密なものになっていった。〔星野〕

【参考】ロシア人が見た幕末日本（伊藤一哉・吉川弘文館）、幕末における対馬と英露（日野清三郎・東京大学出版会）



対馬・浅茅湾内に碇泊するポサドニック号。ロシア軍の建てた小屋も見える（『続通信全覧』より）

5 江戸幕府の合議による開国プログラムと箱館

日本は統治者が合議を重ねて通商開始のプログラムをつくり、国交を伴う通商条約を結ぶことで戦争を招くことなく開国を果たす。その際、蝦夷地支配の拠点・箱館は重要な役割を担った。

老中阿部正弘の貿易法の検討と箱館

幕府が最初に通商を俎上に載せたのは安政3年（1856）7月である。イギリス使節が通商条約を結ぶため2ヶ月後に訪日すると予告したことがきっかけだった。筆頭老中阿部正弘の諮問に対し、目付層が長崎の貿易商法と箱館の沖之口の税法を参考に「沿海御取締見込書」を提議する。貿易を富国の基とし全国枢要の港に税関を設置、税収を蝦夷地「南嶋」の開国と蝦夷地の開拓に使い、余りを幕府の御金蔵に納めるという国富創出が掲げられる。

8月4日阿部正弘は重い口を開き貿易を「富国強兵之基本」とするのが世界の大勢なのかと問い秘密裏に諮問を発する。それを受け有司らは貿易法の作成に取り掛かる。いまだ開国や通商を口にするのはタブーであった。

開国プログラム

安政4年春、幕府は広東のアロー戦争勃発のニュースに驚愕する。オランダ領事官クルチウスは戦争の遠因を清国の南京条約の不履行であるとし、下田駐在のハリスへの幕府の対応に忠告を与える。外国掛老中堀田正睦まさよしにはアメリカへの対応に思い当たる事が多々あった。阿部・堀田らは安政4年春、鎖国政策の放棄を決意し有司等との合

議を重ねながら外交政策を推し進めていく。貿易に慎重な勘定奉行らが長崎一港での交易会所と遊歩区域内の外国商館での消極的な貿易政策を主張したのに対し、目付層は複数港で広い交易会所を開くという積極的な政策を主張した。

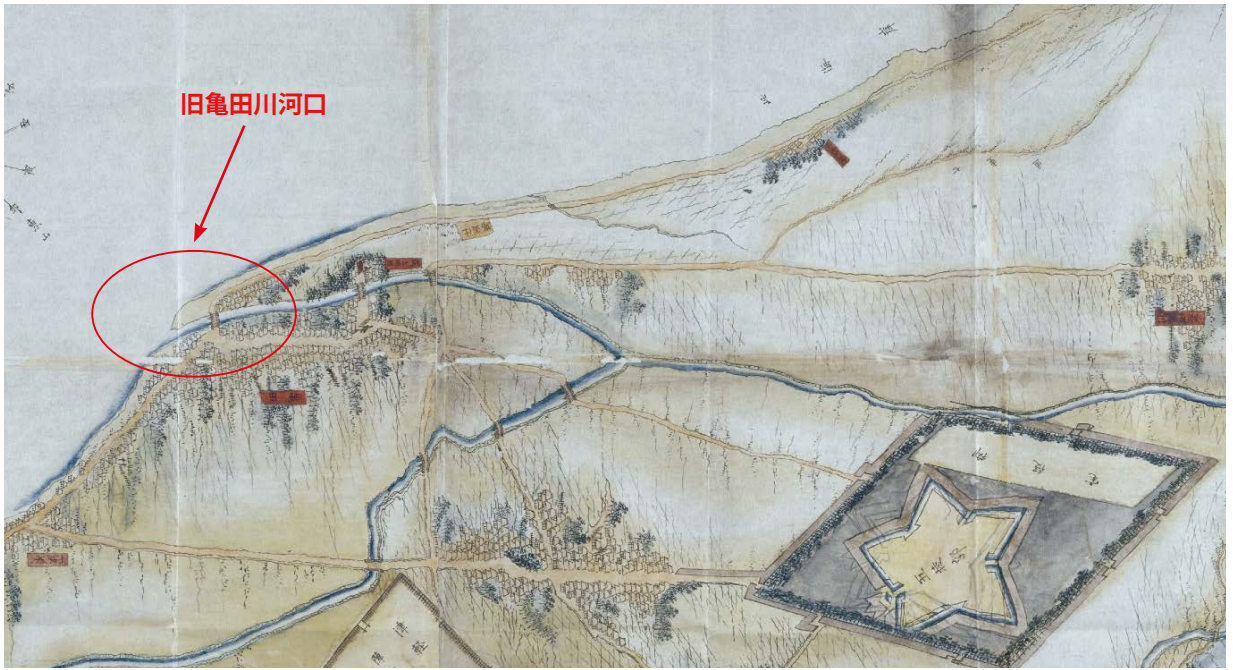
幕府は、①まず貿易法を定め、②通商開始を全国に宣言し人心を安定させ、③その後諸外国と条約の交渉をするという開国プログラムを立てる。

安政5年6月の箱館の交易会所開港

安政4年の幕府の開国政策は紆余曲折を経ながら進展していく。閏5月5日全権タウンゼント・ハリスの諸要求に応え日米協約が結ばれる。第2条では、翌年6月からの貿易及び下田・箱館でのアメリカ人の居留が定められる。

通説では日米協約は「ハリスの不満緩和を目的とした和親条約枠内の規定」とされてきたが、実はそうではなく「幕府が最初に貿易のための居留権を認めた暫定的な通商条約」と解釈できる史料も多い。それならば、ハリスの誘導によって、当初プログラムによる貿易法の決定前に、アメリカとの通商開始が「行き違い」に約束されたことになる。

安政4年6月の阿部正弘の病没後、通商開始のタイミングを伺っていた堀田は7月初め長崎に加え新たに箱館を、そして下田の代わりに新港の貿易開港を決断する。日米協約締結を受け箱館にアメリカ人居留地と交易会所設置の指令を発する。開港日は日米協約の開港に合わせ安政5年6月頃と



亀田五稜郭周辺絵図。五稜郭の着工は安政4年7月である

された。ハリスの出府日の決定後幕府はプログラムを予定通り進めていく。

貿易法調査のため長崎に出張していた水野忠徳・岩瀬忠震らはオランダ・ロシアに働きかけ、安政4年8月・9月、日蘭・日露追加条約を締結、両国との通商を定める。日蘭条約第9条の規定により出島と旧儀物役所に交易会所（場）が開かれ内外の一般商人の相対取引による貿易が始まる。通商開港の許可は国内ばかりか世界に広まり多くの貿易船と商人が長崎に集まる。両追加条約では箱館の開港も定められる。10月ハリスを將軍家定に謁見させ、11月和親条約国との通商開始を全国にくまなく布告する。12月2日堀田は交易会所による貿易と公使の駐在、下田の代替の港に横浜を掲げハリスに新条約の交渉開始を告げる。

一方11月の通商許可の布告を合図として、長崎奉行は市中の海岸に居留地埋め立てを指令、箱館奉行村垣は亀田川河口の交易会所着工と公娼の「異人揚屋」をもつ遊廓を許可する。江戸では14日の3回の交渉までで日米の主張がほぼ出揃う。

交易会所から居留地貿易へ

12月15日幕府は万石以上の大名と有司に2日の堀田とハリスの会談記録とハリス提出の新条約草案を示し上書を求める。翌16日の4回目の会談で幕府委員は交易会所から居留地での貿易の転換を告げる。以降日米の交渉は進展し国交を伴う居留地内における「自由貿易」が定められる。

交渉は新春に議了するがその後第3条に手が入られ、「一個の地」を居留地とすることが明文化される。6月に新たに調印された日米修好通商条約により日本は翌年6月の開国に向かう。大老井伊直弼の政策を汲み、神奈川・横浜開港を準備したのは長崎奉行経験者の水野と同じく箱館奉行の堀・村垣であった。〔清水〕

【参考】日米協約と長崎・箱館の[交易会所開港]—三段階の開港を経る日本の開国—、日本の開国過程の再検討—村垣範正の『公務日記』から見る幕府の外交政策（清水憲朔・市立函館博物館研究紀要第20号・24号）

6 ライスが後押しする下田のハリスの居留権交渉

貿易事務官ライスと箱館渡来

安政4年(1857)4月商人風の大男が突然捕鯨船で箱館に上陸する。エリシャ・ライスと名乗り、奉行宛の書簡と国務長官マーシーの任命証明書を差し出す。彼はその後浄玄寺をアメリカ領事館とし、長らく箱館に滞在した。お玉という女性との同居が有名であるが、ライスの箱館駐在が総領事ハリスとの居留権交渉に大きな影響を与えたことは知られていない。

嘉永7年(1854)3月調印の和親条約は「そこで貿易が自由に行われるという性格のものではなく、アメリカ人漂流民や物資欠乏のアメリカ船が入港できる場所という、限定つきの内容」と『黒船異変』(加藤祐三)は述べている。ところがこの最初の条約には、日米の文化の違いからくる解釈の行き違いが多々あった。

ライスの英文の箱館の官吏駐在条項

箱館奉行は米商船で入港したドイツ人ドルフに急遽ライスとの英蘭通訳と翻訳を依頼する。箱館奉行村垣範正と堀利熙としひろが受け取った国書は「大統領の命にて日本箱館の貿易に関係せるアケンド(エージェント)に任せられ、貿易諸事乃権を委任」とあった。しかし後日ライスは商人でもあることが判明し、後に箱館で高い商品を買わされたアメリカ軍艦艦長の抗議により箱館奉行竹内保徳はライスと衝突する。

4月15日箱館奉行村垣と堀はライスが提出した英文の和親条約第3条と書簡・国書の蘭訳に和解を添え江戸へ送る。臨時の飛脚便は5月7日に外国事務担当の老中堀田正

睦よしに届けられた。

第3条には「Whenever ships of the United States are thrown or wrecked on the coast of Japan, the Japanese vessels will assist them, and carry their crews to Simoda or Hakodate, and them over to their countrymen, appointed to receive them ……」とあり、下線部分を訳すると「(下田または箱館に搬送された)アメリカ船乗組員の身柄は、その受取を任命された同国人に引き渡す」となる。つまりライスはアメリカ特有の官職とされる貿易事務官に委任され、箱館に来たのであった。ところが和文の条約はゴシック部分が欠落していた。また英文の元とされる漢文も同じく欠落していた。

幕府アメリカ人の箱館居留を認める

一方4年3月下田奉行は、アメリカ総領事タウンゼント・ハリスとの交渉で懸案となっていた①役人の手を通さず町で直接買物をする、②領事が定められた遊歩区域外に出張できる、③下田・箱館にアメリカ人が自由に家を買って建て所有できる事(借地権)について、老中に伺いを上げていた。これらは幕府の考えていた和親条約の枠外のことであった。

5月6日に幕閣は①の直買のみを認め他を拒絶する。ところがその翌7日箱館からライスの書簡が届き老中の方針が大転換される。新任の奉行中村時萬ときかずが下田に派遣され、17日上役の奉行井上清直とともにハリスと会談しライスの箱館駐在を告げる。ところがハリスはライスを知らないとい

つつ、一方で副領事の箱館駐在を要求した。下田奉行は懸案事項3件の回答をライスの処遇が決定するまで引き延ばそうとするがハリスは決答を求める。

それを受けた下田奉行は翌18日①②を許可し「居留の為に地を雇う件は、勘考の上決断」と書簡を送る。借地権を伴う居住の翻訳語「居留」の誕生である。20日ハリスは奉行に日米協約草案を渡すが、そこには下田・箱館の米人居留に加え副領事の箱館駐在が書き入れられていた。ライスが提出した英文の条約を、ハリスは居留権交渉にうまく利用したのである。

日米協約が決断させた通商開港

外国商人らは、「未開国」で土地所有が認められない場合には、継続的に貿易を行うため借地に建物を所有できる借地権と自国領事による裁判権を要求した。借地権は日米協約第2条により初めて定められた。

長崎で貿易法を調査中の水野忠徳・岩瀬忠震らに日米協約の締結が伝えられる。日米協約は幕府の当初の意図に反し、アメリカに対する長崎開港と、翌5年6月より一般のアメリカ人が貿易のため下田・箱館に居留できることを定めていた。長崎の水野らは急きょオランダ領事官ドンケル・クルチウスに通商条約の締結を働きかける。8月28日と9月7日、長崎・箱館で外国商人と幕府が管理する交易会所で内外の一般商人が相対で取引できる日蘭・日露両追加条約が調印される。

以後幕府は、公使の駐在と下田の代わりの新港（横浜が候補に浮上）の通商を求め

ていたハリスとの新条約交渉に突き進む。箱館奉行の竹内は交易会所をあくまでも「自由貿易開始までの1ステップ」と考えていたが、岩瀬らはじめ有司の多くはこれを「公式の自由貿易開始」としてハリスが受け入れると踏んでいた。

なお通訳をしたルドルフは、家康の御朱印状を銅版にしたものを持ち日本にきたため、遠隔地の箱館で昆布・醤油など大量の商品の持ち帰りが認められた。〔清水〕

【参考】幕末外国関係文書



煙草をふかすライス。『安政五年写垂美利加来使ライス箱館応接録』より

7 蝦夷地と箱館のアイヌの戸口 ここ

「アイヌ」は明治中期、国会でアイヌに改称された。安政元年（1854）の『蝦夷家数人別産物船數牛馬其外取調帳』にアイヌの人別がある。「本蝦夷地東海岸ヤムクシナイより子モロ、但クナシリ エトロフ迄」の東蝦夷地十八場所在住のアイヌ総計「蝦夷家人別」10,410人 内男5,248人 女5,162人とある。ヤムクシナイは六ヶ場所の野田追の隣である。

西蝦夷地「本蝦夷地西海岸クトウよりシャリ迄、但、リイシリ リフンシリ共」で「蝦夷家」1,055軒 人別 4,384人（男女別省略）。樺太は「北蝦夷地東西家数」373軒 人別 2,639人（同上）で北蝦夷地の境界は不明だが、東浦に七割、西浦に三割が居住、人数総計 17,433人であった（『幕末外国関係文書』第八巻－232）。松前藩領の戸口は不明である。

安政4年（1857）大晦日の箱館奉行村垣範正『公務日記』の人別帳に、小安から八雲までの漁村にアイヌの家数79軒 人数336人とあるが、箱館市中と近在三八か村にアイヌの居住はない。

『函館アイヌの足あと 幕末・明治～平成』（北海道アイヌ協会函館支部発行）で著者加藤敬人氏は「幕末までの箱館には、多くの文献の中にアイヌの存在が確認」出来ると述べる。他に慶応2年（1866）から4年迄箱館在勤奉行を務めた杉浦

誠の日記に「アイヌ写真」とあり、箱館八幡社のお祭りをアイヌに見せている記録もある。人別帳で和入地・箱館に「アイヌ不在」としたことは、幕府の意図的な政策によると考えられる。

また加藤氏は明治以降函館にアイヌはいないという説にも9つの根拠をあげ反証している。うち戦前の4件は以下の通り。①高松凌雲の書物によると官軍に捕縛された「病院掛」小野をアイヌが救出、②明治10年バチュラーが函館でアイヌに面会、③明治25年渡辺熊四郎が買った湯の川の土地5万坪にアイヌのチセとプーがある（写真）、④昭和初期山田祐平の宝小学校の同級生にアイヌがいた。

一方、『函館区役所統計概評』から『函館市史』までの公の資料には、「明治19年（1886）にアイヌが亀田に8名、函館はゼロ」という記述があるのみで、これがこれまでアイヌ不在の根拠とされてきたと思われる。 [清水]



湯の川のチセ（住居）とプー（食料庫）

としひろ 8 箱館奉行堀利熙による蝦夷地の寺院建立

開港当時の和人地の寺院は松前藩領を除くと、箱館の浄玄寺（浄土真宗大谷派）、高龍寺（曹洞宗）、称名寺（浄土宗）、実行寺（日蓮宗）のほかには尻沢辺と山背泊の地蔵堂があった。東蝦夷地には有珠の善光寺（浄土宗）、様似の等澍院（天台宗）、厚岸国泰寺（臨済宗南禅寺派）の三官寺があり、西蝦夷地に寺はなかった。

ところが幕府が蝦夷地を直轄地とするに及び、キリスト教対策のほか、防備・開拓のための和人の定住促進政策により仏教の布教を許可したことから寺院の建立が進展する。

まずそのきっかけは、安政2年（1855）6月に老中阿部正弘が下田・箱館の踏絵を検討させたことであった。在府箱館奉行堀利熙は踏絵に反対し、翌3年2月23日に踏絵は3年間見合わせとする。翌日寺社奉行が下谷報恩寺（真宗大谷派）掛所の西蝦夷地建立を老中に伺う。その同じ日に堀は「真宗は偏執の習風も深い」が「邪宗（キリスト教）之患、佛教の弊よりも甚敷はなはだしき」と寺院の容認を主張する。また同じ頃箱館奉行の竹内保徳は蝦夷地警備・開拓に定住者を厚遇するため「在住組頭（副奉行）」新設を江戸に上げる。

以上を背景に、安政3年5月寺社奉行は西蝦夷地に下谷報恩寺末寺を認める。その後同年末から仏教各派が堰を切ったように、相次いで寺院の設置に向かう。真宗大谷派により松前藩領の進出を阻害されていた真宗本願寺派も、末寺である南部川内村願乗寺の堀川乗経が箱館での掛所開設を願い出る。ついに4年9月箱館の御蔵地辺に、



堀川乗経。真宗本願寺派の箱館布教の先駆けとなった（『函館市誌』より）

本願寺派としては初めての拝借地一万坪が認められる。

以下各宗派の動きを見ると、浄土宗・有珠善光寺が西蝦夷地に小寺・庵室13を、安政4年4月様似等澍院が掛所を、5月称名寺が岩内に帰厚院をそれぞれ願い出たほか、翌閏5月に実行寺の日能が森町に自力で末庵を建て、9月には箱館最大勢力の高龍寺が末寺建立を寺社奉行に届けた。これらの寺院建立には、貿易開港を機とするキリスト教対策や、南蝦夷地への定住化促進以外に、各宗派の勢力拡張競争という側面もあった。〔清水〕

9 ペリー艦隊の「買いもの」と箱館の人々 ～小嶋又次郎『亜墨利加一条写』の視点

ペリー来航の頃、^{うちま}内澗町（現末広町）で雑貨酒類の店を営み町名主を務めていた小嶋又次郎は『亜墨利加一条写』を著した。藩と住民の中間に位置する町名主の立場から、日々変化する箱館の町とペリー一行の様子を活写したもので、来航直前の安政元年（1854）3月27日には、松前藩が市中に公布した2か条の触書に関する記述がある。その第1条は「異国人共の上陸はできない」という幕府のお達しで、「もし上陸するようなら、市中の家々は残らず戸口を閉め切り、戸締まりをするように、売り物・米・酒は勿論、目立つ品は隠し置き、食物等は見えないようにせよ」と命じている。

4月15日ペリー艦隊3隻が来航すると市中の鐘・盤木が打ち出され、俄然「^{そうぞう}騒々敷」になった。次いで4月21日2隻の大型蒸気船（ポーハタン号、ミシシッピ号）が来航した。4月22日ペリー艦隊と松前藩応接掛の会談を経て、連日のように『一条写』に登場するのは、「買いもの」である。4月24日の条では「店へ彼等は我が儘に入り込むが、警護方は咎めず、店先は言うまでもなく奥座敷までも土足で歩行し、不行届は言うまでもない。それは彼等の“国風”のようだ」と述べ、「御触書に右のような品を隠し置くべしとの命令があったが、どのように

心得ているのか、御上様よりお咎めもない」と歎息している。

極めつきは4月29日の「蒔絵之重箱、同印籠、金襴之類、^{さて}扱外いろ々有之候得共、筆に不及」というペリーの買い物である。4月晦日の条によると和親条約の「薪水・食料・石炭等の船中欠乏の品を供給する」という内容の御触は「市中に公表されず」とあり、何も知らされていない箱館の人々は、「欠乏品の供給」どころか、自由に商売ができると思い込み、好奇心をかき立てられたようである。

以上から読み取ることができるのは、事の成り行きに何ら手を下せない封建支配者に対する町名主又次郎の皮肉な眼差しではなからうか。 [岸]

【参考】アメリカ一条写（紺野哲也校注。『日本近代思想体系1 開国』所載）



左は「瀬戸ノ花生買求図」。右はペリー一行が使用したメキシコドル。いずれも『亜墨利加一条写』より

10 箱館諸術調所と長州ファイブ

箱館諸術調所は、安政3年（1856）に、竹内、堀の両奉行が幕府に願い出て許可された正式な組織にもかかわらず、その実態は武田斐三郎の私塾に近いものだった。調所の舎屋も御殿坂西の斐三郎役宅の隣家を買って増築したものであった。

ここでは蘭学は勿論、航海、測量、砲術、築城、造船、^{せいみ}舎密、器械の諸学を教授し、幕吏、諸藩士を問わず入学を許し、公私貴賤の別なく人物本位の教育をしたので本州各地から学ぶ者が集まった。

前島密などは藩士でもなく、箱館へ向かう途中お金を落とし、無一文の状態で箱館にたどり着き、栗本鋤雲に驚き呆れられながらも世話をしてもらい、ここで学ぶことができた。

長崎海軍伝習所が閉鎖され、築地の軍艦操練所が設けられたが座学中心で、それに物足りない者達が、実学中心の箱館諸術調所に集まってきた。

英国領事館も置かれた開港都市箱館では生きた英語を学べたのと、君沢型と並んで我国西洋型帆船の嚆矢ともいべき箱館丸、亀田丸の2隻の存在が大きな吸引力になった。

後に長州ファイブと呼ばれた5人のうち、「鉄道の父」と呼ばれる井上勝と、東大工学部の前身を作った山尾庸三の2人が諸術調所に来ている。

井上は万延元年（1860）に、箱館丸の二度目の航海の帰路、品川で乗船して箱館に来たと『前島密自叙伝』に書かれている。



長州ファイブ。留学したロンドン大学には、顕彰碑が建てられている（萩博物館蔵）

長崎伝習所、蕃書調所の後、箱館に航海術、英語を学びに来たのだ。

山尾は亀田丸がニコライエフスクに航海すると聞いて木戸孝允に頼み込み箱館に来ている。彼らは箱館で1年半ほど学び江戸へ戻っているが、山尾などは品川の英国領事館の焼討にも参加しているにも拘らず、その後、「西洋の現実を知り」「生きた器械」にならんと文久3年（1863）に横浜からロンドンへ向かうのである。

このように当時の有為の若者達を惹きつける磁力を発揮した諸術調所も、斐三郎が元治元年に幕命で江戸へ帰ると自然消滅となった。 [犬島]

11 掃苔紀行—有能だった3人の箱館奉行の墓碑を訪ねる

エース級が登用された箱館奉行

竹内保徳、堀利熙、村垣範正の墓碑を訪ねました。3人は幕末期に幕府の遠国奉行の一つとして設けられた箱館奉行として活躍した人物です。

嘉永6年(1853)にペリー艦隊が浦賀に来航、翌安政元年(1854)には日米和親条約が締結され、下田と箱館を開港、ペリー艦隊は同年4月に箱館に入港します。ペリーが箱館を去った翌月、幕府は箱館奉行所を34年ぶりに復活させます。そして現在の函館市・七飯町大沼・木古内町までの一帯を直轄地とし、その後松前周辺を除く蝦夷地の全土を上知しました。

再設置された箱館奉行所は、諸外国との外交交渉、海岸防備、蝦夷地の統治など重要な役割を担ったため、奉行も広い見識と優れた才覚をもった開明派でなければ務まらず、老中ら幕府中枢の信任を受けたエース級の人材が登用されました。

功績大だが、寂しく眠る竹内保徳

安政元年6月、最初に箱館奉行となった竹内保徳は200俵の貧乏旗本出身ですが、老中首座・阿部正弘に抜擢され活躍します。箱館着任後、まだ国交がなかったフランス艦隊が、艦内に壊血病が蔓延したため緊急入港し上陸を陳情した際、江戸表に許可を得ず、人道上から独断で実行寺での治療を許し約100名の命を救います。6名は帰らぬ人となりましたが、外国人墓地に埋葬されました。実行寺境内にある『日仏友好の記念碑』はこの史実を伝えています。また後に外国奉行として文久遣欧使節団の正使となり、攘夷運



竹内家の墓

動が激化する中、江戸・大坂の開市、新潟・兵庫の開港の延期の目的で欧州を訪問、その5カ年の延期に成功します。勘定奉行辞任後は、大阪町奉行に補されたものの着任せず、ひっそりと第一線を退きました。

私は雨降る中、竹内保徳が供養されている東京都新宿区の養国寺を訪ねました。一般の墓碑群の中にひっそりとあり、探すのに苦労しました。竹内の功績を称える案内板もなく、少し寂しい気持ちにもなりました。ぜひ案内板は設置してほしいですね。

老中と口論の直後に自刃した堀利熙

堀利熙は華麗なる外交官一族です。日米和親条約を締結させた『林復斎』は伯父であり、列強とタフな折衝の末に日米通商修好条約を締結させ、水野忠徳、小栗忠順と共に「幕末三俊」と^{ただなり}顕彰された岩瀬忠震は従兄弟です。林羅山を祖とする儒学・朱子学の学者一族でもあり、幕府の昌平坂学問所は元々林家の私塾でした。



堀家の墓

堀はペリー来箱後間もない安政元年7月に箱館奉行となり、前月に任を受けた竹内保徳、同月に一步後れで任を受けた村垣範正との3人体制で箱館奉行がスタートしました。堀は箱館赴任後、榎本武揚らを率いて蝦夷地奥・樺太などの調査・巡回を行います。兼務の外国奉行として交渉中の日普修好通商条約(普はプロシア=現ドイツ)締結直前に、老中首座安藤信正との認識・意見の違い等で江戸城内にて言い争いとなり、その翌日に切腹。享年43歳でした。

堀を供養している文京区の源覚寺を訪ねますと、さすが華麗なる一族である堀家の墓は墓地・奥の一角を大きく占有し、功績を称する史跡標もあるなど、函館人として嬉しく思いました。もし榎本武揚の上司であった堀が、戊辰戦争時に生きていたら箱館の歴史も違っていただいでしょう。

貴重な日記を残した村垣範正

村垣家は代々庭番役を勤めました。祖父の定行は初期の箱館(松前)奉行や勘定奉行を務め幕府の財政担当まで上りました。

祖父の功により範正は勘定吟味役に抜擢された後、箱館奉行に就任します。堀と蝦夷地の調査、安政の大獄で失脚した岩瀬忠震に代わり外国奉行を兼務しました。日普修好通商条約の交渉中に突然自刃した堀を引継ぎ、日本側全権として調印に繋げました。

村垣は万延元年(1860)、日米修好通商条約批准書交換のため、幕府使節団の副使として米国軍艦ポーハタン号にて渡米。批准書を交換し、アメリカ大統領ブキャナンと会見します。その一部始終を克明に記した航海日誌(『村垣淡路守公務日記』『遣米使節日記』)は当時を知る貴重な資料であり、これを残した事が村垣の一番の功績と言えるかもしれません。

私にある日突然、「村垣ですが」と電話があり、「ブログで先祖の事を発信してくれてありがたい。ゆかりの地で一杯やりたい」と言われました。それは範正から4代目の子孫・村垣正澄様で、少しの時間ながら杯を交わす事ができ感激しました。それがきっかけで谷中霊園にある村垣家の墓碑も訪ねる事ができました。〔遠藤〕



村垣奉行の子孫と筆者

12 イギリス商人ポーター～函館と30年余を共にした盛衰

1823年頃生まれ、船長としてイギリス、南米、インド、中国等を航海し、上海の税関勤務3年で安政6年(1859)開港間もない箱館に渡来した。箱館におけるポーターの地位は、「デント商会(上海本店のイギリス系巨大商社)代理人のポーター氏は、全ての商人を合わせたよりも多く貿易している」(1861年イギリス領事代理ユースデンの言葉)と言われるほどであった。

万延元年(1860)4月に箱館奉行組同心に飼い犬が噛み付いたことで、刀で傷を負わされ、文久元年(1861)6月奉行の制止を無視して「山之上新地」に居宅新築を強行するなど、様々な事件を引き起こした。

文久元年8月イギリス公使オールコックは「デント商会が他の誰かを派遣し、そして日本から彼を解雇するのが賢明であることをもちかけるために上海のデント商会の彼の社長に個人的に手紙を書いてみようと思う」とまで述べ、トラブルメーカーと目されるほどポーターは威勢が良かった。

その後、1864年デント商会代理人がハウエルに引き継がれてから、ポーターは独立して中国貿易に従事した。明治3年(1870)閏10月22日開拓使から函館港長に任命されているが、その任務に「当港在留支那人…取締のため」とあり、上海の税関勤務や中国人雇用の経験を買われたのであろう。

公職につくため全商売を止めたが、港長



ポーターと2人の息子。『函館港長に何があったか』より

職はわずか2年で廃止され、生活は困窮に向かう。日本人女性との間に港長在任中に娘一人、港長解任後に息子二人が誕生した。「イザベル・ブラキストン・ハコダテ・ポーター」という娘の長い名前には、ポーターの函館とブラキストンへの想いが込められている。写真はポーターが60歳前後と思われる、右側が長男トマス、左側が二男フレデリック。ポーターは明治20年までは函館にいたことは明らかであるが、明治24年(26年説あり)、横浜にて68歳で亡くなった。 [岸]

【参考】函館港長に何があったか(西島照男)、ポーター商会の盛衰と函館商業経済(千代肇)。F.O.410Japan Confidential Print. 横浜開港資料館 架蔵

13 ゴシケビッチが箱館で立てた 日本最初のクリスマスツリー

今では、師走の街角や家庭を彩るクリスマスツリー。実は日本で最初に登場したのは幕末の箱館でした。安政5年（1858）、初代駐日ロシア領事ヨシフ・ゴシケビッチが箱館に赴任後、ロシアのクリスマスである「ヨルカ祭」を祝ったときに立てたものが、文書として証明できる最初のクリスマスツリーになります。

北海道立文書館（札幌）に収蔵されている、当時の各国使節から寄せられた文書をまとめた『各国書簡留』に、安政6年12月22日に、箱館奉行所宛ての「ヨルカ祭」への招待状が確認されました。

そこには「明後日（24日）の祭礼に奉行、副奉行（計4人）が来て楽しんでほしい」という歓迎の言葉が記されていて、「高い所を綺麗に装飾した」と、ツリーが立てられたことを示す表現があります。「昨年のように役人の子供たちも、来ることを望む」とも記されていますので、前年の安政5年にも開催されたことが分かります。

日本最初のクリスマスツリーは、一般的には1860年にプロイセン使節が江戸（東京）に、初めて飾ったとされていますが、箱館の方が2年早いこととなります。

ツリーが立てられた場所は「各国書簡留」によると、「大町カ子^ネセン裏手」とあり、当時のロシア領事館があった実行寺近くの、現在の「函館元町ホテル」横、弥生坂を少し下った付近と思われます。



アジアと新たな連携を模索し箱館にツリーを立てたゴシケビッチ（三戸町立歴史民俗資料館提供）

ロシアは、クリミア戦争（1853～1856年）で英仏などの連合軍に敗れ国際的威信を失いかけていたため、従来の大国外交を転換し、英仏などに対抗できるアジアとの新たな連携を模索していました。

ゴシケビッチ領事も、箱館では欧米他国のような、武力を背景に強引に門戸を開くのではなく、融和を持って独自の外交をすすめるようにしたのでしょう。赴任したその年の12月24日に、箱館奉行所の役人や近隣住民との親交・交流を深めようと、ロシア式のクリスマス祭を開催したのです。〔遠藤〕

【参考】「函館の森林の再生と活用を考える会」代表・木村マサ子氏提供資料、各国書簡留（北海道立文書館蔵）、北海道新聞（平成10年7月27日付、平成22年12月24日付）

2. 奉行所から開拓使へ。近代函館を拓いた先駆者たち

※文中の丸数字は本編の原稿番号に対応しています



明治15年11月頃の連続写真(田本研造撮影・5枚組の右3枚。撮影ポイントは現豊川町にあった氷室屋上)
 明治11・12連年の大火により市街地の整理が断行された。写真は近代的な都市計画により生まれ変わって間もない頃の街の様子を伝えている。函館では明治10年前後から北海道最初の銀行が開設されるなど、近代的な金融資本の蓄積が始まる。出資者は杉浦嘉七や田中正右衛門らの場所請負人、平出喜三郎らの北前船船主、相馬哲平や渡邊熊四郎らであった。その背景には、開港から箱館戦争期に台頭した新興商人の資金需要があった。海岸沿いに建ち並ぶ新築の商家は、彼らを含め近代形成期に活躍した函館商人の意気込みを感じさせる。その一方で中央資本の進出も見られ、海岸部では大日本郵便汽船三菱会社の倉庫・事務所の建設が進む。海運業の主導権争いで三菱としのぎを削った三井も、この翌年に共同運輸を設立し函館に進出する



「皇国の北門」の人物群

自由貿易開港から8年、日本を開国させた徳川政権は倒壊した。明治2年（1859）5月18日榎本軍降伏の3日後明治天皇は蝦夷地を「皇国の北門」とする開拓の諮問を発する。幕末は日本の近代揺籃期であり江戸幕府の多くの政策が幕臣など人材とともに明治政府と開拓使に引き継がれた。

民では享和年間から明治まで函館で各時代の要請に応えた商人に代々の大石忠次郎がいた¹⁴。京都吉田神社守護職出身の男が箱館八幡宮の菊池家に入り、箱館戦争で実施が遅れていた神仏判然令による北海道の社寺の分離を行う¹⁵。開港箱館は世界各国から多くの博物学のハンターを呼び寄せる

活動拠点ともなった¹⁷。

ベンチャー商人の函館進出

パノラマ写真の浜通りに立ち並ぶ大小の商家は、ビジネスチャンスを求めて全国から渡ってきたベンチャー商人たちが建てたものである。故郷との二重生活をした彼らの家族関係は興味深い¹⁶。対岸の下北半島からも多くの先駆者が渡ってくる¹⁹。世界のビック・ネームとなったソニーとも函館は知られざる関わりがある¹⁸。近代都市・函館の一等地で自由闊達にビジネスを展開した商人たちは、家作にも独創性を発揮する。今も残る和洋折衷の土蔵造商家建築は、その1つの典型である²²。



キリスト教に生きた女性たち

ロシア正教の最初の受洗者・酒井篤礼の妻糸子は初の女性信徒として半世紀余り元町の教会敷地に住み奉仕の人生を送る²⁰。会津藩の出身で蝦夷地に渡り活躍した^{きい}雑賀重村は明治13年、45歳の若さで急死するが、その死後、妻のアサは信徒としてキリスト教系女学校に勤め、婦人矯風会運動でも函館から東京、京都へと各地で活躍した²⁴²³。 [清水]

拡大写真1 トムソン造船所の右にある背の高いポールの上には英国旗が掲げられる。大日本郵便汽船三菱会社の15棟のレンガ倉庫はまだ工事中で、この翌年に完成する。大三坂上には教会群や洋館が見られる。八幡坂は現在のバス通りの一本上までで行き止まりとなり、その先は聖保禄女学校（旧白百合学園）敷地。カトリック教会とこの女学校のため、現元町に4千坪の居留地が確保されていた

拡大写真2



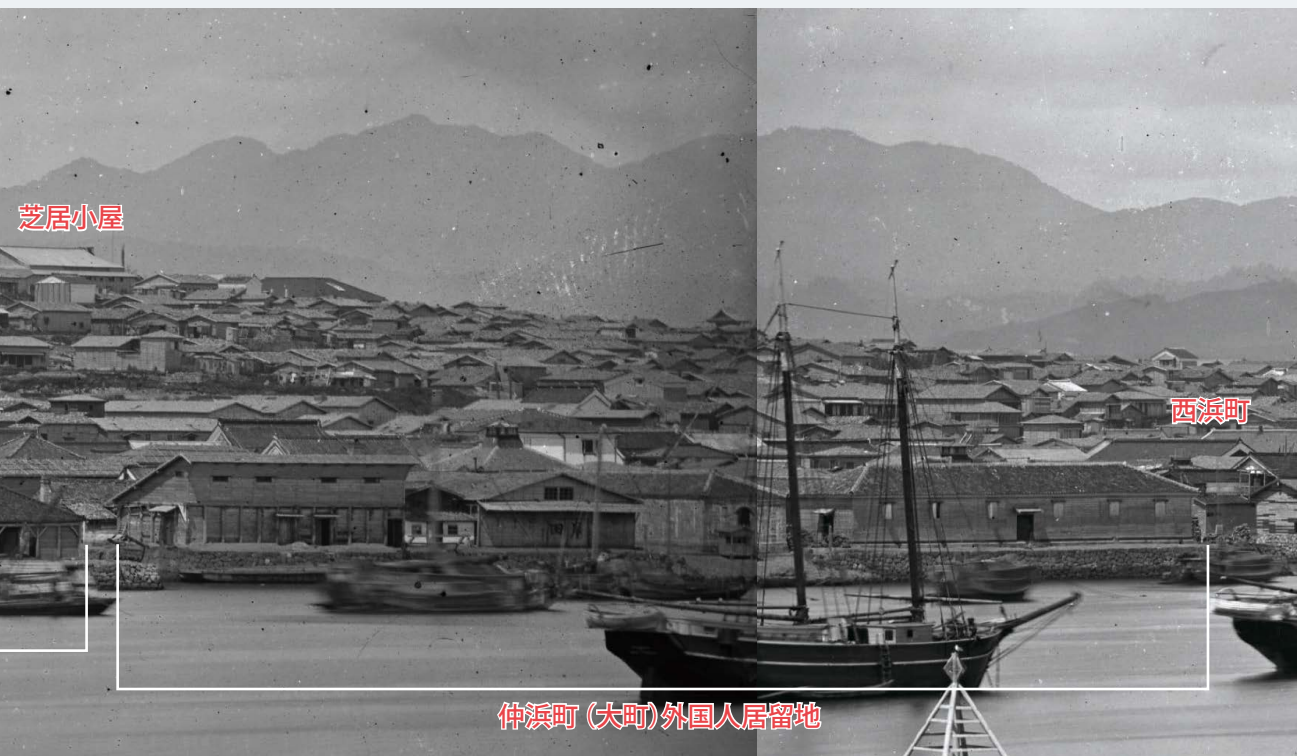
拡大写真2 当時、北海道の玄関だった東浜棧橋から左(東)側に、新興の貿易関係の船具商・運送店が軒を連ね、大型の勝田旅館も見える。港には弁財船(北前船)が碇泊し、それを見物する人たちの姿も写し込まれている。写真ではその真上に見える現在の元町公園あたりには、函館県庁や現存する旧開拓使函館支庁書籍庫がある。基坂を下れば、函館病院、見張り櫓のある警察署、電信局が並んでいる。画面右上には、七面山の己巳役(きしのえき)海軍戦死碑と明治12年海軍省設置の鳥居も確認できる

拡大写真3





拡大写真3 画面左手前には基坂下の税関があり、その右(西)に重なるように商館・倉庫が見える一画は仲浜町(旧大町)外国人居留地。商業地はさらに西浜町につながっている。弥生学校はこの年4月に落成した



14 享和から明治までの代々の「忠次郎」

享和から明治初期まで代々続く「大石忠次郎」という男の記録が散見される。享和元年（1801）9月の最古の箱館地図に「花屋敷 忠次郎」とあり常盤坂の弥生町七番地辺りで芝居小屋を開いていた。文化3年（1806）箱館全戸数半分 350 戸焼失の「青山火事」で焼け出された 1,400 名余りが芝居小屋に避難している。

文政4年（1822）松前藩に東西蝦夷地が復領される直前の地図に「忠次郎拜借地」がある。箱館の戸口は 948 戸・4,367 人に増えており、商人のほか、津軽・南部からの女性の出稼人も増えていた。『文政五年四月 箱館申送書並箱館町役人其外在々被下品物付控』（『函館市史史料編第一巻』）に忠次郎の名が見える。忠次郎は「山ノ上町」（現弥生町辺）開発の恩賞として毎年米 15 俵を幕府から下賜されていた。

「高田屋旧蔵 箱館絵図」（函館市中央図書館蔵）は箱館山に三十三観音が置かれており高田屋が没落する天保4年（1833）以降に描かれたと思われる。絵図に大石忠次郎の事蹟が伺える。常盤町の坂を挟み赤い建物が連なる茶屋街の突きあたりに舞台のある「定芝居」と山手に「大石ノ松」のある忠次郎の屋敷がある。七面社の参拜道入り口にある赤い鳥居の左手に天神社があり忠次郎の勧進による。同時代の人々にとって豪商高田屋より忠次郎が身近な有名人であったと思われる。

幕末の「忠次郎」は、芝居小屋

の経営の他、箱館奉行から土木・建築の用達に命じられる。七面山麓の忠次郎の山ノ上新地先一部が安政6年の自由貿易開港後上海のイギリス系巨大商社デント商会の支店支配人として箱館に乗り込んだポーターの洋館地となった。官製の大町居留地以外に、民有地に外国人の借地権を設定して居留地とすることが認められた嚆矢であった。

また忠次郎は、ロシア領事館・ロシア病院、遺愛幼稚園の処にあったイギリス領事館の建築、大町外国人居留地築出しなど開港期の箱館の洋館や土木工事を請負う。だが時には赤字を出し、外国人からクレームを受けたこともあった。いずれにしても代々の忠次郎は進取の気性に富み、近代黎明期の箱館において、いつも時代の要請に応える事業に取り組んできた。〔清水〕



忠次郎の芝居小屋と大石の松の屋敷、天神社（「高田屋旧蔵 箱館絵図」部分拡大）

生い立ちと菊池家との縁組

菊池重賢は天保4年（1833）、京都吉田神社の守護職にあった名家「玉田」に生まれ、嘉永5（1852）年、父玉田司馬之助とともに渡道した。明治3年、重賢の甥玉田真弓（重彦）を養子として、奉行所祈願所として重きをなした箱館八幡宮に代々奉仕していた菊池家と玉田家の縁組がなされた。

重賢は安政5（1858）年、箱館八幡宮の大神主拜命を受け、同年正月から翌正月にかけて、箱館奉行所に申請して「サッホ口麓」に石狩鎮守八幡宮の創建を企画した。これは幕府瓦解後の北海道全体における鎮守神の成立を予想させる。石狩八幡神社、小樽住吉神社、古平稲荷社、室蘭八幡宮など末社勧請にも精力的であった（『神社調査』『菊池重賢文書』50）。重賢は、明治天皇勅旨により三神を鎮斎、開拓長官東久世通禧がこれを奉じて渡道したのが札幌神社（後の札幌神宮）である。

神仏判然令（神仏分離令）

慶応4（1868）年から明治元（1868）年にかけて出された太政官布告と神社制度の変革に伴い、北海道の神社行政について中央との折衝が必要となった。重賢は札幌神社の将来を思い、神祇省等と精力的な折衝を行った。

開拓使より明治5年2月「北海道神社改正取調掛」の兼務を命ぜられ、神仏分離を進め社格を付して行政の領域に入れるべく、同年7月、銭函村を振り出しに、約5カ月かけて全道を巡回調査。仏像を神体と



菊池重賢

する神祠の改祭、寺院中の神祠の整理、神社の統合整理、神官配置等の見込みを立てた。

初期の札幌神社（北海道神宮）

その頃の札幌神社は窮乏を極めていた。新都市札幌は物価が高く、積雪や泥路のため人足が不足し、薪炭費が増した。薄給の神官は定着が悪く、冬期の祭典執行もままならず、「新規御鎮祭」にもそれに見合う公費の補助もない。貧しい移民が大半という氏子の支援も期待できない。明治7年から開拓使や神社官庁へ請願を始めるが、逆に歳費を減らされるほどであった。

独自の財源を確保するため、全道に毎年1度神札を有償頒布し、実費を差し引いた分を蓄えることを開拓使に願い出るが、官社の祭典費に配札で得た金を充てることは不条理とされた。伊勢神宮、出雲大社の配札の事実を挙げて反論するが受理されず、再三再四願書を提出している。このような訴えが理解されるのは菊池が退官してか

らずっと後の明治 26 年、札幌神社が官幣中社になってのことである。

函館八幡宮祠官再就任と退職

重賢は明治 8 年 1 月、教部省の発令で都々古別神社* 宮司に転任するが、同年 4 月養母病氣看病のため帰函する。7 月同職を免ぜられるが、明治 10 年 8 月函館八幡宮祠官に再任される。すでに函館八幡宮は明治 5 年 5 月、崇敬社国幣小社に列格して、重賢への期待が高かったことを推測させる。

函館八幡宮は明治 11、12 年の大火で類焼、明治 13 年現在地の谷地頭に奉還したこともあり重賢は多事を極めた。同年 7 月退職にあたって時の宮司五島広高は「本天国幣小社に列し又奉務精励感銘を受けた」と感謝を述べている。

函館区の桜庭為四郎の「内密上申」には、「重賢は安産講として婦人 150 名の祈祷を行い、得た金を自己のため使用した」とある。探偵書には、「重賢が薄給であるため、生活費に困って私用した。東京から来る八幡社主宰に官職辞表を呈するべきだ。さもないければ免職になると言われ、重賢の辞職が決定した」という。当時の宮司も明治 10 年 12 月赴任し、菊池退職後に退職しているなど、政治的な背景が感じられる（『北海道神宮史』付録、『公文録写』、『重賢文書』請願書）。

* 同名で現福島県棚倉町に 2 社あり。共に元官幣中社

教導への専心

重賢の「日次記」明治 14～15 年によれば、彼は住居を下大工町、会所町、恵比須町、青柳町と移転する。この間売薬、骨董商などの営業をされていて生計の苦勞が伺える。一方、布教・巡回にも意欲的で、ある社の勧請請願の時は函館山への植林も有志支弁で行っている。明治 23 年札幌へ移転すると、各社への教導や神道教師の団結にも力を注ぎ、植林の益が全道各地で共感を呼んだ。各村々での布教はもとより屯田兵舎、監獄署きょうかいでの教誨等も見逃せない。

晩年の重賢

明治 31～32 年の日誌によると、孫重雄ともども祭儀の執行はもとより、札幌区内をはじめ近村神社の創設、祭儀の奉仕等、積極的な活動が見られ、道庁の命により郷社無格社など数々の社掌を兼務した。札幌戸長役場の承諾を得て教育勅語の誨告を行うなど、最後の最後まで神道の布教に努めた重賢の活動は特筆されよう。その生涯を考えると、身に付けた徳の数々や、名門の出でありながら難事を突き抜けた誇りには感動を覚える。〔佐藤〕

【参考】北海道神宮史上巻、同付録「菊池重賢について」（能戸邦夫編纂）、北海道の神社、八幡宮、春日大社、国幣中社、別表神社、函館市史・通説編 2 巻第 11 章

16 二つの故郷を持つ商人

函館経済を動かした外来商人

函館の商人というと連想されるのは、四天王といわれた渡辺熊四郎・今井市右衛門・平田文右衛門・平塚時蔵や相馬哲平などの「豪商」かと思われる。その人物像に関する逸話や評伝は残っているが、商売に関する書類や家族に関する記録について一次資料とされるものはほとんど残されていないのが実態であろう。

函館の商人は、函館で生まれ函館で育ち、商売を引き継いだかということ、必ずしもそうではない。他地域から函館に移住し商売を始めた人、函館に店を構えながら家族は故郷に残した人、店も構えず家族も故郷に残した人、そういう人たちが明治以降の近代都市函館の経済を大きく動かしたようだ。そのような商人の中から、商売の実態や家族との関係について記録が残る3人を紹介する。

本妻を故郷に残した西澤弥兵衛

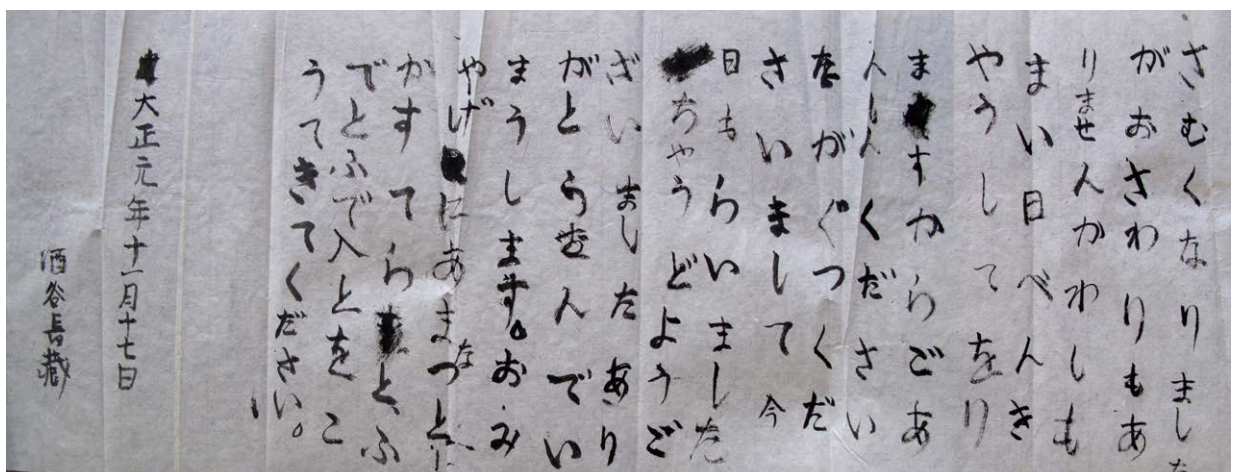
西澤弥兵衛は文政12年(1829)近江国

斧磨村(現滋賀県愛荘町)に生まれた。後に京都に移り住み、沖船頭などを務める傍ら、現在の末広町に店を構える。当初は太物商だったが、回漕業・海産物商・貸金業等を行い、後に択捉へ進出し漁場経営も行った。西澤の商売に関する資料を調べると、函館から道東、択捉へと進出していく様子が伺える。

西澤の本妻タツと子供は京都に暮らし、函館では別の女性ミヨが店を切り盛りした。商売に関する資料以外に家族間の手紙が残されていて、タツが、函館で店を引き継いだ息子に宛てた手紙が興味を引く。孫への熱い思い、息子夫婦への願い、京都へ来たミヨのことなどが綴られている。

店を構えず単身赴任した酒谷長作

酒谷長作は明治6年(1873)加賀国橋立村(現石川県加賀市)に生まれた。実家は同郷のチガイヤマチヨウ酒谷家の船頭を務めていて、後に分家してチガイヤマサ酒谷家となる。回船業を行うとともに、貸金



大正3年、酒谷長作に宛てた長男(当時10歳)の手紙(次ページ参照)

業も行ってた。長作は明治41年から同郷で函館に店を構えたワチガイ酒谷家の後見人として、函館に単身赴任した。自らの店は構えず、持ち船と手紙のやりとりで、樺太をはじめ日本海側を中心に市場の動向を探りながら、海産物などの売買を行っていた。

長作の家族は橋立で妹夫婦と同居していた。妹の夫は婿養子で長作よりも20歳位年上で、残された手紙

から、長作に金融取引に関する指示などをしていたことが見受けられる。長作の資料の中には子供たちの手紙も残されている。妻の手紙とともに同封されたものだ。歴史資料として子供の手紙が取り上げられることは、有名人以外では希である。単身赴任の長作に対して家族で手紙を書き、近況を知らせたり、お土産をねだったりしていた様子が分かる。

函館生まれ、橋立育ちの酒谷小三郎

酒谷小三郎は明治28年(1895)に函館で生まれ、加賀国橋立村(現石川県加賀市)で育った。父親は、前出のチガイヤマチョウ酒谷家の船頭を務めながら、函館でもワチガイ酒谷という屋号で店を開いた。雑貨・荒物を取り扱うとともに、灘の酒「白鹿」の北海道・樺太総代理店でもあった。

小三郎がまだ12歳の時にこの父親が亡くなったため、前出のチガイマサ酒谷家の



昭和初期、アトリエ山洋荘にて、酒谷小三郎が妻、娘、絵のモデルとともに撮影した写真

酒谷長作が後見人となり、函館の店を経営した。なお両酒谷家の間に直接の縁戚関係はない。

小三郎の産みの親は函館の女性だが、育ての親は橋立に住んでいた父親の本妻だった。旧制中学まで橋立に住み、東京の画学校にも通った。大正4年(1915)頃に来函し、経営に携わるようになる。従来の酒や醤油などの代理店だけではなく石油・ガソリンも取り扱い、証券会社も設立した。

画家としては、大正15年・昭和3年(1928)に帝展に入選、船見町に「山洋荘」というアトリエも構えていた。

以上3人の商人の有り様からも、函館の経済は複雑な商人の集合体の上に成り立っていることが伺える。また、その実態を示す資料を地道に読み解いていかないと、イメージ先行の商人像だけが語り継がれていくことになるように思われる。

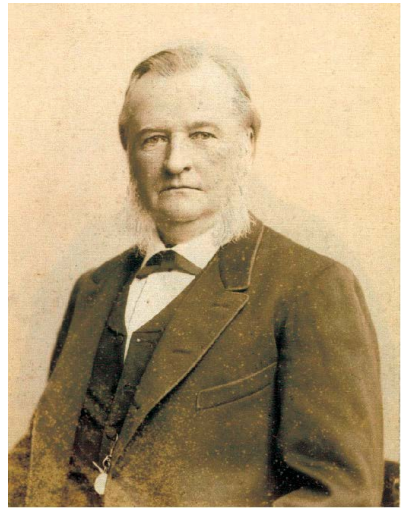
[保科智治・市立函館博物館学芸員]

17 函館が先導した日本の博物学黎明期

開港後多くの外国人博物者が箱館を目指した。すでにシーボルトらが動植物や鉱物などの自然資源を出島から世界へ紹介しており、欧米の日本への関心が高まっていたからである。博物学者の多くは、領事官、医師、牧師など公費で来日したアマチュアで、収集物は自国の専門家へ届けられた。例えば、初代ロシア領事ゴシケヴィチは、夫人と共に昆虫を採集しモチェルスキーに送った。それを基に4編の論文が発表され、114種の昆虫に学名が付けられた。また、初代イギリス領事ホジソンは植物を王立植物園に送っており、同植物園発行の「日本産植物目録」には46科156種の函館産植物が記載されている。

一方、文久3年(1863)自費で箱館に来た貿易商人ブラキストンは30年間の滞在中自ら鳥類研究を続けた。明治14年(1881)東京築地でのアジア協会例会にて津軽海峡が動物分布の境界であると発表したところ、地質学者ミルンがこれを支持し「ブラキストン線」と名付けた。

研究目的で来日したマキシモヴィチは、正規の教育を受けたロシアの植物学者であった。万延元年(1860)自費で箱館に来たが、外国人の行動範囲制限により自由な植物採集ができなかったため、須川長之助を助手として箱館を拠点に1年2ヵ月に及ぶ道南植物調査を行った。その後、長之助と横浜・長崎の植物調査を行い、元治元年(1864)に本国へ帰った。以上の研究成果は、37編の論文と著作「日本及び満州植物誌」で発表され、71科166種267変種に達する日本植物の命名を行った。彼



マキシモヴィチ (北海道大学大学文書館蔵)

の研究方法は長之助を介して日本の植物研究者に伝えられ、その後の日本博物学の発展に多大な影響を及ぼした。

このように、自費来日して学術的成果をあげた博物学者の活動拠点となっていたことが函館の特徴である。よって、日本の博物学黎明期において函館は独自の貢献をしたと言える。 [三上]

【参考】蝦夷地の外人ナチュラリストたち(村本直人 1994年幻洋社)、マキシモヴィチ・長之助・宮部(高橋英樹編・2010年・北海道大学総合博物館)

18 函館のまちづくりに貢献した旧幕臣—井深^{もと}基

ソニー創業者の一人井深^{まさる}大は2歳で父を亡くした為、祖父に育てられ「父がいかに科学的」だったかをおりにふれ聞かされたと回想している。この祖父が“井深基”で函館の産業、経済発展に尽くした官吏である。明治24年8月22日付函館新聞の記事月旦（人物評）に「地位には恵まれていないが名声は噴々たる」と高い評価が載る位の人物だった。

“会津門閥九家”のひとつ井深家出身の藩士であり朱雀隊士として戊辰戦争を戦った後、明治5年に北海道開拓使が募集した北方警備^{らそつ}の為の邏卒（巡査）に応じ斗南藩から渡ってきた。当初は樺太行きが決まっていたが暴風雪の為、渡航出来ず函館勤務となった。

明治7年には邏卒から行政職になり、函館県大書記官を務めた時任為基の下で手腕を発揮した。例えば、明治12年の大火後の復興に奔走し、その功績は新聞に掲載された。さらに明治16年に北海道共同競馬会社設立発起人に時任為基、園田実徳らと共に名を連ね、北海道物産共進会審査員、翌17年には水産談話会説明員等の重要任務をこなして業績を重ねた。

これら基の手腕、力量、人柄を大いに見込んだ時任為基は愛知県知事になったのを機に基を招いた。県庁勤務の後、基は額田郡、中島郡、西加茂郡、碧海郡^{へきかい}の郡長を歴任し新田開発等の産業分野で顕著な業績を上げた。特に矢作川^{やはぎ}を水源とする枝下用水^{しだれ}の整備は重要で、その受益地である豊田市内の2寺、1神社では現在でも貢献者の一人として肖像画が飾られ開削者祭祀が執り



左から孫大8歳、妻ミユ、基67歳、義娘さわ

行われている。

会津の名門に生まれ函館開拓使で活躍し愛知県でも功を成し、著名な孫を遺した基に取って函館は一家の生活を支え20年暮らした人生の転機となった地である。

妹の久仁は太刀川善吉に嫁ぎ二代目善吉は従兄弟の子の大に早稲田大学の学費を援助していた。

会津と共に函館での基の営みが脈々と大に受け継がれていると思うと函館との深い縁を感じるのである。 [土田]

【参考文献】私の履歴書 / 井深大、会津・斗南藩と函館開拓使 / 近江幸雄、枝下用水と西澤真蔵 / 達志保他

19 箱館・函館に影響を与えた、下北半島ゆかりの逸材

函館（箱館）と下北半島との間には、太古の昔から人・物の往来があった。造船の街・函館のルーツとも言うべき匠たちも下北の出身であったほか、医療や宗教の分野でも、下北出身の優秀な人材は少なくない。

いちょうじ 島野市郎次

寛政2年（1790）10月、長後村（現青森県下北郡佐井村）の船大工・市郎次が、当時はまだ海岸であった神明町（後の大黒町→現弁天町）で、小舟の製作と修理を細々と開始する。これが箱館の最初の造船所である。

市郎次は文化元年（1804）、高田屋嘉兵衛が築島を造り、ここに大きな船の作事場を設けた時も協力している。代々の市郎次は官や時代に翻弄され4回も移転を余儀なくされるという悲劇の主人公でもあり、明治末期7代でその造船所は終焉を迎えた。

辻松之丞

辻家も佐井村からの移住者で、代々船大工をしていた。高田屋造船所で働いていた3代目松之丞は、天保3年（1833）、高田屋嘉兵衛の3弟金兵衛が密貿易の嫌疑で取り調べを受けた際、造船所を引き継ぐ。

5代目は、ペリー来箱後の安政年間、官の命を受けて続豊治に協力。箱館丸、亀田丸、豊治丸の建造に携わる。この5代が明治26年（1893）、69歳で亡くなるまで、洋型帆船

ほか通算約190隻を新造、修理も手がけたが、これを機に遺族は倉庫業に転じた。

続豊治

豊治の父は川（河）内村（現青森県むつ市川内町）の出身で、松前城下に移り船大工をしていた。川内村には古くから鍛冶町という地名もあり、造船ほか、船釘、錨の製造も盛んな土地であった。その父が豊治の生まれる前に亡くなったため、豊治は2歳の時に父の同僚（続）五郎吉の養子となる。6歳の時箱館に移り、14歳で藤山勘八に弟子入りして造船を学んだ。

16歳の時にゴロヴニン事件が解決し、その際に帰国するゴロヴニンを乗せたディアナ号（英名ダイアナ）の堂々とした姿に接している。18歳にして、船大工として一人前と認められた勘八は、豊治の将来を高田屋金兵衛に託す。

高田屋の造船所でも豊治は優れた技量が認められ、程なく組頭となる。33歳の時、



続豊治が建造した箱館丸のレプリカ

その能力を伸ばしてやりたいと考えた金兵衛に伴われ、江戸、日光、京坂等の寺社見学の旅に出る。しかし箱館に帰って2年後に高田屋は^{けっしょ}關所により没落した。

その後は仏壇作りや箱館八幡社の山車・弁天丸の製作に従事するが、嘉永7年(1854)4月、ペリー艦隊が日米和親条約締結に伴い箱館を下見に来た時、絵筆の道具を忍ばせて、バンダリア号に近づいた。ディアナ号に憧れて以来の大型艦船だったからだ。

不審に思った水兵が捕らえ奉行所に引き渡すが、箱館奉行堀利熙はその熱情に動かされる。豊治は沖の番詰所稲川仁兵衛の応接方従僕の肩書きを与えられ、外国船への出入りが許される。船の構造等の研究を重ねた豊治は、箱館丸を始めとする堅牢な船を数多く造った。

田沢春堂

田沢家は医業の家で、父快純は祖父快庵とともに佐井村から箱館へ移った。文化4年(1807)、箱館で生まれた春堂は、江戸・京で医学を修め、箱館で開業する。江戸では高野長英と同門であった。

安政元年(1854)11月松前藩の医師となり、翌年箱館奉行雇医師となる。万延元年(1860)、箱館病院設立時には他4名とともに頭取となった。

中川五郎治

明和5年(1768)川内村で生まれ若い頃松前に渡った。エトロフ漁場の番人(後に小頭)をしていたとき、ロシア人に捕ら

えられロシア各地を転々とする。その間、医師から種痘書を手に入れ、帰国後松前や箱館で日本で初の種痘を施し、各地の医師に伝えた。

堀川乗経

文政7年(1824)、川内村の願乗寺の二男として生まれ、17歳の時弘教のため蝦夷地に渡る。小樽・箱館間の宗派を調べ、西本願寺の寺院がないことに愕然とする。

西本願寺への理解を得るため、安政6年(1859)梁川町から中の橋、今の高砂通りを箱館山に向かう約3kmの新亀田川(願乗寺川)を開削して治水を施す。その功に対し幕府は1万2118坪の土地を下賜し、それが現在の西本願寺函館別院となる。〔佐藤〕

【参考】函館(まち)・歴史(とき)・人物(ひと)、北海道の宗教人、函館別院創建之原由並開基堀川乗経、北海道史人名辞典、函館海運史、郷土読本函館ドック50年の回顧、函館税関統計報告 第四部北海道造船業



新亀田川を開削した堀川乗経の偉業を讃える函港新渠碑(西本願寺函館別院境内)

20 酒井糸い—最初のハリストス正教会女性信徒

後藤糸い、同郷の酒井篤礼と結婚

切支丹禁教下の幕末、箱館に来たロシア人によってロシア正教がもたらされた。明治6年(1873)禁教の高札は撤去されるが、それ以前に信徒になった数少ない勇氣ある女性にエレナ酒井糸いがいる。

旧姓後藤糸いは陸前栗原郡出身、同郡出身の医師酒井篤礼と18歳で結婚し、夫・舅と共に函館へ移住する。夫が沢辺琢磨・浦野大蔵と共に宣教師ニコライから密かに洗礼を受けた後、糸いは函館で生れた長女澄や沢辺の妻たちと共に受洗するが、禁教下定住はママならず、夫に従って東北各地を転々とした。

実家で次女実出産後、函館で“家族水入らずの生活”も束の間、夫が正教伝道の科で投獄されて郷里「預り」の身となり、夫不在のまま三女信(聖名ヴェラ)出産後、函館に落ち着く決心をする。

夫は任地、糸いは函館で

明治11年大町居留地内のホテルに洗濯婦として働き、女主人ソフィア・アレクセーエヴナから語学など多くを学ぶ。同年夏ウラジオストクに赴き叙聖、晴れて司祭になった夫イオアン酒井は任地の盛岡・八戸・秋田地方で伝道一筋の生活を送る。その夫を精神的支えに、糸いは函館で、教会の洗濯婦として雇われ、正教会敷地内に住むことになった。

長女は宣教師ニコライの始めた東京の正教女学校(女子神学校)へ進学、やがて次女も進学した。糸いは明治15年には、函館正教女学校女子部で裁縫を教える。



酒井糸い(函館の鈴木陽子氏蔵)

この頃教会内に女性信徒親睦会(後の函館正教婦人会)を創設し、翌々年には正教女学校隣に生徒30人ほどの「裁縫女学校」を創設、校長として函館新聞に入学者募集と共に裁縫・和洋洗濯依頼に対応するとの広告も出している。

学校は明治23年「正教女学校」と改称、裁縫女学校時代から東京で高等教育を受けた娘達も帰函し母に協力、仙台で和裁・編物を修得したマリア厨川つるも経営に参加した。

露館のおつかさん

一見順調の様であったが、糸い33歳の明治14年3月、夫イオアン酒井は47歳で盛岡十字架教会にて死去した。

長女テクサ澄は母の学校に5年勤めた後結婚するが、長男を赤児で亡くし医師の夫も不慮の事故死で、幼い遺児清子と勝を母糸いに託して明治29年秋上京し、再度東京女子神学校の教壇に立つが、9年後結核のため37歳で死去した。

悲しみの消える間も無く、明治40年8月「函館大火」は市内を焼尽、正教会聖堂と附属する建物の全ては灰に帰した。

明治44年には次女、姉と同じく正教会教師で助産婦でもあったマトロナ実が8人の子を残し急逝、満41歳であった。うち続く身内の不幸や災難にも希望を失わず、東北訛りでトツトツと語る酒井糸子を函館教会の人々は「露館のおつかさん」と呼んで敬愛し、彼女に相談した。

大正5年（1916）、ビザンチン様式の新

聖堂（現聖堂）が竣工した。その建物の一隅に住み、僅かな給与を教会から得ていた糸子は70歳を超えて、一握りの白米を教会に持参する「米一握り運動」を提案、教会の財源を支えたという。

大正14年、彼女が育て上げた孫アレクサンドル荻原勝の妻が赤子を残して病死した時、78歳の糸子は48年余り住み慣れた教会内から市内相生町の勝の家に移り同居、翌年8月79歳で死去した。

最初の女性信徒エレナ酒井糸子の葬儀

は、『正教時報』によると、「エレナ酒井老姉の永眠… 函館正教会は老姉多年の教会奉仕に報ゆるが為教会葬を以って老姉の最後を飾れり」「満堂溢れん許りの会葬者あり」と記されている。

〔酒井〕

【参考】ニコライ堂の女性たち（中村健之介・中村悦子）、明治の日本ハリストス正教会（中村健之介訳編）、函館ハリストス正教会史（函館ハリストス正教会）、函館のロシアホテル（清水恵・函館日口交流史研究会会報 No28）、正教時報（大正15年9月号）



再建工事中のハリストス正教会。写真の台紙には「大正4年11月田本写真館謹製」の文字がある。聖堂の前に立つ人物のうち、左から5人目が酒井糸子

21 函館山東西麓のポルトガル領事ハウエル

「尻沢部町付谷地頭」の佐吉の拝借地にポルトガル領事館があった（『ドイツ・諸外国編』参照）。元治元（1861）年ポルトガル人A. ケースが赴任するが1か月余りで病没する。イギリス系貿易商社デント商会代理人のA. ハウエル（長らくハウルと表記されてきたが、現在はハウエルが一般的）が領事を引き継ぎ、谷地頭にポルトガル領事館を開く。後に船見町に移転し明治6年まで9年余り山麓の民有地に領事館が置かれた。

和親条約の佐吉の景勝地の休息所

箱館開港の4ヶ月前の安政元年（1854）11月箱館奉行は日米和親条約附録で定められた外国人休息所三カ所じつぎょうを実行寺、谷地頭の佐吉宅、七重浜の久兵衛宅に定めた。（『幕末外国関係文書』八巻—120）。領事館の置かれた佐吉宅は現八幡宮道路向かいの谷地頭町6～8番に広がる広い場所で当時は海が一望できる景勝地であった。

英国商人ハウエル、ポルトガル領事に

ハウエルはデント商会の経営破綻後独立し「ハウル商会」を設立し明治6年（1873）までポルトガル領事も兼任していた。明治6年世界恐慌の年にハウル商会の会計係のウイルソンに出資金を譲渡し帰国する。

ポルトガルは「安政五か国（米・蘭・露・英・仏）条約」後最初に修好通商条約を締結した国であった。

デント商会とポルトガルの深い関係は、ポルトガル国王の子女がイギリス王室と婚姻関係であったことや、商会がポルトガル

領のマカオから香港そして上海とアヘン取引などで巨大化したこと、横浜居留地の支配人口レイロがマカオ生まれのポルトガル人であった事などから推察できる。

ハウエルの人物像を伝える史料として、妻を同行していたことや数枚の写真と日本商人との裁判記録があり、彼らに西洋の商業論理を厳しく求めた。

明治4年（1871）にイギリス公使パークスが明治政府に対する対日条約改正案の起草の際に、函館のハウエル商会から出された意見書がある（『幕末維新期の外交と貿易』鶴飼政志）。ハウエルは「旧幕府時代の場所請負制度の存在」は運上金が輸出品価格に転嫁され「貿易活動に有害」であると批判し、明治政府が日本人の脱税行為を防ぐために課す「蝦夷地海産物」の6%の「海官税」は条約違反であると、税体系の単純化を請願する。また特定の居留民の利益になる商人領事制に反対している。

自身も兼任領事であったハウエルであるが、これらの指摘から冷静な観察眼が伺える。

軍用地となる佐吉の景勝地

佐吉の所有地はその後国有地となる。「明治9年9月27日 谷地頭町、能登佐吉所有地 6825坪5分8厘、函館第一の勝地に噴水等も有場所種芸に適する地、将来木培養所にしたく購入したい旨……開拓長官黒田清隆に伺書」。図面の敷地内に「柳川（熊吉）住居」「葛餅や」がある。明治25年の地図では山手の旧脱走軍「大鳥圭介」らの所有地と合地される。昭和6年（1892）地図

に「聯隊区司令部」が敷地内に見え旧領事館地から山手一带は要塞司令部のある陸軍用地となる（小沼健太郎『ビジュアル明治函館年表上・中』）。

領事館船見町のハウエル宅に移転

一方船見町のポルトガル領事館があった民有地の旧居留地は大正4年（1915）までイギリス商人の居宅として使われた。ウ

イルソンの借地権は土地とともに相馬合名会社に売却される。土地の名義人は遠藤吉平であった。三千坪の土地（現在船見町7番）の一部は北洋漁業家・眞藤慎太郎（本編⑳）の別宅などとなる。英国商人が住んでいた痕跡としては、思い出したように咲くウイルソンの母国・英国の花ジギタリスと洋館の古い赤煉瓦の破片だけが残る。

〔清水〕



谷地頭「能登佐吉」旧ポルトガル領事館地所跡。開拓使に届出された地図によれば、その土地は、八幡社の参詣道から東側の山手に広がっていた(本図は北海道文書館蔵の筆写解読よりトレース)

22 家作から見る明治の函館商人

旧仲濱町の海産物委託問屋・松橋商店の1世紀前の建物が現存していることが確認された。西濱町・仲濱町・東濱町は慶応2年（1866）から戊辰戦争を挟み明治4年（1871）にできた通りである。江戸時代からの波止場の連なる岸壁の埋立で出来たバンドの町（『街並・文化編』）で、北の商港都市・函館の一等地であった。写真の建物の前にある岸壁には板塀が廻され、東側の旧大町居留地との間の埋立地にはハイカラな商店が立ち並ぶ。

有力海産物委託問屋・松橋商店

『函館市史』によると商店の創業者と思われる松橋象作は明治35年に「函館米穀塩海産物取引所」（明治27年大町に開所）の監査役に名を連ねている。歴代の理事に相馬理三郎、監事に平出喜三郎、太刀川善吉、相馬哲平の名がある。明治末の『最新函館案内』に有力な漁場仕込み・海産物委託問屋に西出孫左衛門、松橋象作などが紹介されている。

女主人松橋チル

明治40年の大火で現在地に移転したと思われる、北洋漁業拡大期の明治45年の電話帳に「丸大松橋商店米穀・海産物委託問屋松橋象作」とある。登記簿では大正2年（1913）7月、仲濱町22番地松橋フミから同番地の松橋チルに売買（同じ番地に、同業の本庄丑吉商店が併記されている）、昭和10年（1935）に松橋修に相続されている。富原章の昭和8年の復元地図に仲濱町22番に松橋チルとあり、女手で24年

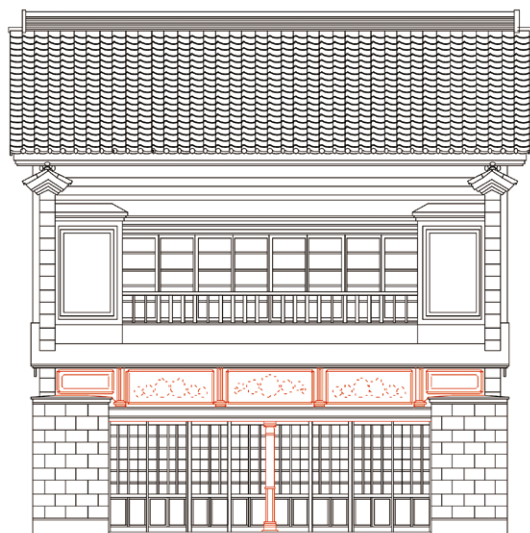
間続けた商店を息子？修に相続したと思われる。

フミとチルとの関係は不明であるが、思いつくのは本編で保科智治氏が言及した函館商人の「二人の妻」である。推測の域をでないが、フミは象作の「本妻」でチルは仕事を共にした「函館の妻」であろうか。

店舗に続く木造住居には仏間がなく床の間ある部屋に茶の炉が切られている。派手さのないシンプルな内装で四間の広い押入れが印象に残る。裏の大通りに抜ける通り庭に面して土蔵が並ぶ。

アールヌーヴォー風の^{こてえ}鏝絵

一方店舗は煉瓦1枚積の壁を土で塗り込み漆喰で仕上げ、ファサードは当時流行の和洋折衷の土蔵造商家建築である。1本のドリス式の鋳物柱に支えられる5間（9m）のアールヌーヴォー風の3連の西洋蔓の鏝絵が目を惹きつける。櫓の階段を昇った2



松橋象作商店の復元立面図。赤い部分は原型が残る
作成：富樫雅行一級建築士事務所

階の2室の客座敷に床間、黒檀枠の彫刻欄間が残る。高欄から函館港が一望でき商談や饗応があったと思われる。修がチルから相続した土地・建物は3年余で小熊倉庫株式会社に譲渡される。

創業者と思われる松橋象作の来歴は不詳である。函館には加賀橋立出身者が多い。橋立は廻船業を営む北前船船主、船頭の集落として有名であるが、明治中期から汽船・鉄道・通信などの発達で帆船の船主らは事業転換のため函館や神戸などに移住したという。

土蔵に残された瓦の家紋は「陰下がり藤」、松橋商店に丁稚として働いていたという古老の話が伝えられ忙しい店であったという。

女が守ってきた商店

棟札は無く成田山新勝寺の普請成就祈願の木札が小屋根の梁に供えられる。いつの頃の物であろうか、古い臼や漬物樽、米櫃、洗い張りの板……。台所や土蔵に入り過去を思い遣ると早朝から薄暗闇で黙々と家事や仕事に勤しみ家を守る女たちの影が浮かんでくるようだ。

末広町の渡辺熊四郎の金森洋物店（明治13年）、大町の太刀川善吉米穀店（明治34年）、松橋象作海産物委託問屋（明治40年代）と、往時の姿が残る3つの明治期の煉瓦壁土蔵造商家は、開港以降東京以北最大の都市「大函館」へと発展する街の変化を教えてくれるリビング・ヘリテージ（生きた遺産）である。〔清水〕



明治後期と思われる仲濱通りの様子。左から2軒目が松橋商店。現在、外観は改装されている

23 幕末維新を駆け抜けた男—^{さいが}雑賀重村

立待岬の啄木一族の墓の向かい側にその墓はある。墓には故茅部山越郡長雑賀重村之墓と記されている。若き日の名前は一瀬紀一郎。会津藩士である。多芸多才で様々な顔を持つ。蝦夷地代官、絵師、絵図面方、外交家、幕府海軍、奥羽越列藩同盟の密使、戊辰戦争フィクサー、開陽丸乗員、榎本軍開拓奉行組頭、斗南藩開産掛、開拓大主典、北海道郡長。雑賀という名前が示す通り、遠く石山合戦で有名な雑賀孫市に連なる。その後変遷を経て会津藩で一瀬姓を名乗る。家禄は高くはなかったが、会津三家の一つ築瀬三左衛門の三女浅子を娶っている。

嘉永7年（1854）、19歳の時に幕府使節に従い初めて蝦夷地入りし箱館から宗谷を巡検している。函館図書館蔵の『蝦夷廻浦図絵』は彼の作だと言われている。二回目は、25歳の時に会津藩領となった標津の代官を勤め、その後、蝦夷地から戻ったが、いつの間にか幕府海軍に入っている。理由も時期も不明である。戊辰戦争開戦時に開陽丸で大阪に行き大阪城から古金18万両を運び出し江戸へ運ぶ。この時、石山合戦での

先祖への想いが蘇ったのか一瀬から雑賀孫六郎へと改名する。その後奥羽越列藩同盟の密使、会津落城後は榎本と共に蝦夷地へ向かい、開拓奉行組頭として室蘭に詰める。榎本軍降伏後は阿波徳島藩にて謹慎させられるが翌年会津藩関係者も謹慎を解かれ、新たに斗南藩の開産掛箱館詰となる。

しかし開拓使から出仕要請があり開拓少主典に就く。開拓使では室蘭港や札幌本道の整備に大きく貢献した。明治12年（1879）に茅部山越の初代郡長になる。明治13年に、箱館病院高龍寺分院で惨殺された会津藩士を悼み、雑賀など会津藩有志が「傷心惨目」の碑を建てた。これを見届けたかのように病を得て明治13年9月10日に没する。享年45歳。

鉄砲衆として、本願寺門徒として信長に立ち向かった雑賀の血が350年の時を経て一瀬紀一郎に蘇ったのか。激動を駆け抜けた男の墓が立待岬に静かに佇んでいる。

〔犬島〕

【参考】幕末の密使（好川之範）、会津藩斗南へ（星亮一）



若き日の重村が描いたと言われる『蝦夷廻浦図絵』（部分）

24 遺愛女学校初代舎監・函館婦人矯風会の創設—さいが雑賀アサ

キリスト教婦人矯風会とは平和・純潔・禁酒を目標とするキリスト教徒の女性団体で、明治19(1886)年、大酒飲みの夫に苦しんでいた矢島^{かじ}楯子が東京婦人矯風会を創立した時、雑賀アサは北海道最初の会員となり、翌年に函館婦人矯風会を組織した。当時アサは遺愛女学校の裁縫教師兼舎監であり、函館婦人矯風会には同僚の長嶺貞も参加、校長デカルソンやハンプトン元校長も応援し、禁酒や廃娼運動(函館には蓬莱遊廓等に多くの娼妓がいた)の講演会や手芸講習会などを開き函館の婦人に呼びかけた。

明治15年開校の白亜洋風校舎の女学校は当初生徒が集まらず苦勞する。両親が会津藩出身の川上^{としまわ}常盤は「キリスト教の学校ながら舎監に会津武家の奥方で非常に立派な婦人が着任された」と函館の叔母から勧められ12歳で遺愛寄宿舎に入ったと述懐する。

雑賀^{やなせ}アサは天保14(1843)年、会津藩家老築瀬三左衛門2300石の男3人女7人兄弟の3女として会津若松^{しげむら}城下生まれ、藩士雑賀重村と結婚、会津戦争では夫婦共死こそ免れたが身内知人に自害も含め亡くなった者多く、「おもいきや捨てし生命の今日までもながらへて世の憂き目見んとは」と詠んだ。

のち斗南藩士として函館詰になった夫と函館へ移住、病気で臥せていた夫妻は同

郷の日向(内藤)ユキに看病され、その縁で縁談を世話している。

アサがキリスト教徒となり、職業婦人、新しい女性として社会と深く関り活躍するのは、19歳で『蝦夷廻浦図絵』を描き、明治初期開拓使役人として札幌本道開削に手腕を揮い、茅部山越郡役所初代郡長になった夫重村が明治13年45歳で急死後の事である。遺愛で9年余勤めた後上京、青山女学院の教師、京都平安女学院舎監を歴任、何処に於いてもキリスト教婦人矯風会の重要ポストで活躍した。

アサは明治40年、64歳で永眠。東京青山墓地には妹築瀬多美子と連名の「雑賀阿佐子之墓」があり、「青山女学院・函館遺愛女学校・駿台英和女学校・日本メソジスト九段教会右有志者建之」と刻まれている。
〔酒井〕

【参考】遺愛同窓会だより第12号、遺愛会報・復刊第1号、遺愛学院草創期の群像(1)(作山宗邦)、幕末の密使(好川之範)、萬年青(内藤芳雄編著)



築瀬家の墓域、右が雑賀アサの墓石(酒井撮影)

3. 北洋の進展、函都の繁栄。悲喜こもごもの人間模様

※文中の丸数字は本編の原稿番号に対応しています

大正から昭和初期は「大函館」といわれた華の時代であった。大正10年（1921）大火で末広町から十字街・蓬萊町の電車通りの周辺と山側二千戸が焼失するが復興は早かった。

ソヴィエト誕生後、大正14年正月に日ソ基本条約が調印される。ソ連領事館誘致運動が函館ほか小樽・室蘭・敦賀・新潟・伏木で展開されるが、歴史的経緯で函館に決まる。企業合同による新たな日魯漁業株式会社の事業本部も小樽を退け函館になった。



昭和4年、真砂町（現大手町国際ホテルの場所）に大規模コンクリートビル・日魯新社屋が竣工。同年4月「島徳事件」が発生し、全国を揺るがす（写真は『日魯漁業経営史』より）

北洋漁業家の群像

日魯と言えば北洋漁業の中核であり、創業者堤・平塚の印象が強いが、『日魯漁業経営史』を紐解くと、さらに強烈なキャラクター眞藤慎太郎に出会う。広大な海域を舞台に展開され、国内外で利権争いの火花を散らした北洋漁業において、日魯が覇者へと上り詰めたのは、この玄洋社出身の幹部に負うところが少なくない²⁵。

函館に巨万の富と発展をもたらした北洋漁業。その真髄は母船式沖取漁業という画期的な操業形態にあったが、それは戦争・政変の産物でもある。

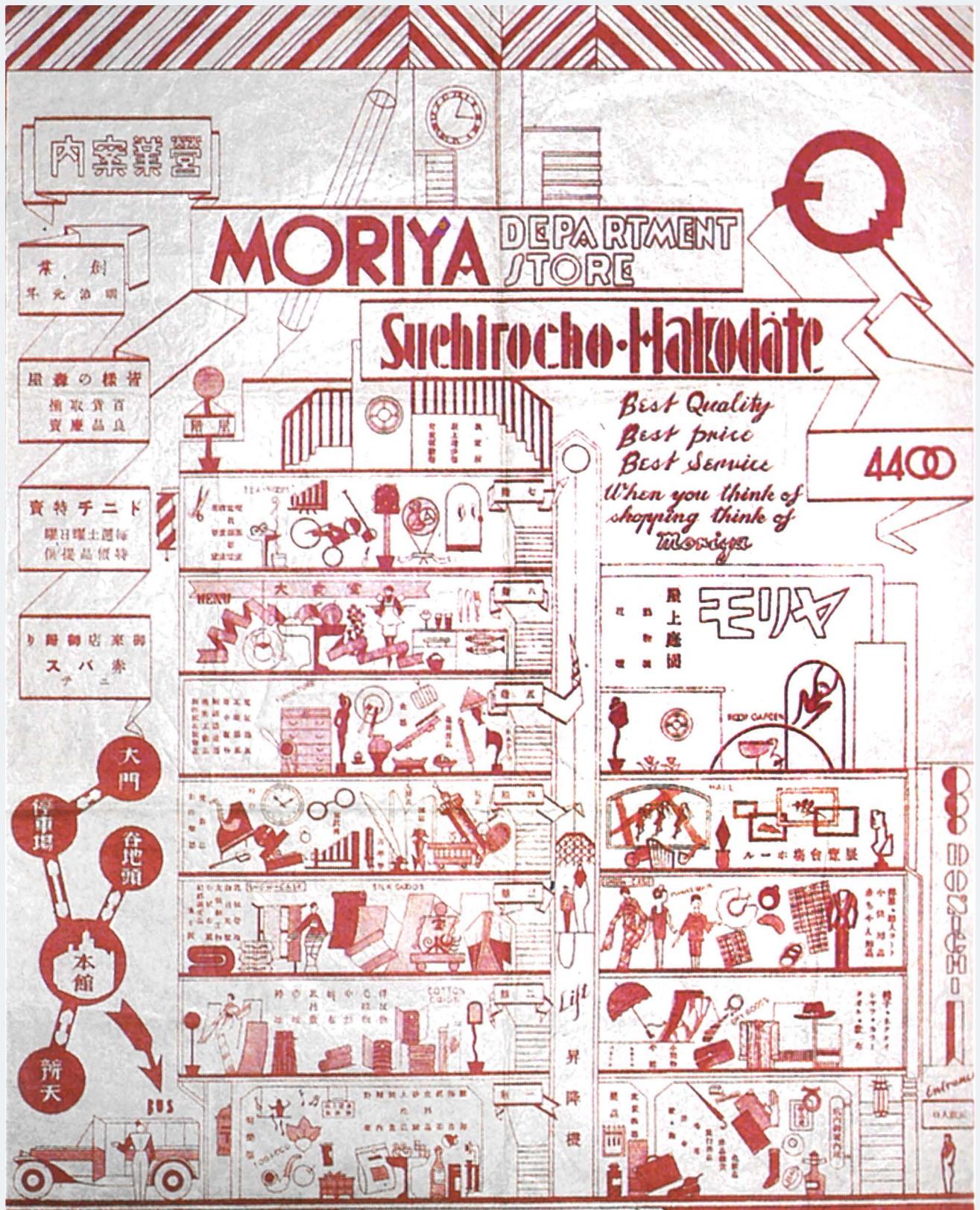
日露戦争勝利により日本は北洋での優位を得るが、革命で誕生したソヴィエト政府は、おいそれとそれを許さない。公海上で漁をして加工まで行うという方式は苦肉の策であり、考案したのは加賀橋立出身の実業家であった²⁶。一方、ロシアの敗戦と崩壊は、白系ロシア人の運命も左右する²⁷。

発展期の函館人の諸相

明治20年（1887）代になると幕末・維新から函館に移り住んだ商人達の次世代が成長し各界で活躍する。明治前期の商人として有名な遠藤吉平の子息吉三郎は日本の水産植物学のパイオニアとなる²⁸。

また函館商人は中央に頼らず、自力で港湾整備に着手する。その中で、後に「近代港湾の父」と呼ばれる廣井勇が、その名を世に知らしめた小樽築港の前哨戦とも言うべき函館漁港船入澗防波堤工事で見事な成果を残している²⁹。

いち早く西欧文化の洗礼を受けた函館は文化都市としても成熟してゆく。幕末以来の写真術の系譜は絶やさずに受け継がれ³⁰、「北日本が生んだ希有の図書館人」岡田健蔵による膨大なコレクションは世界に誇るものであり、今もそこから新たな発見が生まれている³¹。 [清水]



大函館と呼ばれたころの昭和5年、4階建の旧館に7階建の新館を増築してオープンした森屋百貨店(当時の広告より)エレベーターが各階を行き来し7階の屋上には時計塔、空にアドバルーンが浮かんだ。宝飾・ギフトから衣料品、文化ホールに屋上庭園(旧館)、食料品から家具、雑貨、着物に大食堂(新館)と、まさに夢とあこがれを売る消費文化の殿堂「百貨店」の登場だった。市内各所まで送迎する「赤バス」、英文のキャッチフレーズにも注目したい。函館では北洋漁業関連会社のほか大手製菓工場や中央の官庁や大手商社・金融機関の支店などのサラリーマン市民が増え、新しい消費文化の担い手となった(図版五島軒提供)

25 政治結社出身の漁業家・眞藤慎太郎の生涯

「日魯漁業株式会社は明治三十九年十一月三日の堤商会に端を発し……堤清六氏や平塚常次郎氏らの先覚者によって開拓され、両氏に続く多くの先人の労苦によって支えられ」「この歴史は、同時に



日魯の制服を着た若き日の眞藤
（『函館市誌』より）

わが国北洋漁業の歴史であり、対ソ関係や、欧米などの国際情勢に大きく左右される産業であっただけに、国家興亡の一側面としても極めて興味ある事柄」（『日魯漁業経営史』）。昭和46年（1971）深秋の田上束稲の序文である。

玄洋社から漁業家に転身

眞藤慎太郎は、ロシア革命によるソヴィエトの誕生とパルチザンによる日本人漁場の襲撃、第一次世界大戦後の大不況といった時代背景の中、大正10年（1921）国策による大合同で誕生した新「日魯漁業株式会社」に現物出資で参加した中小漁業家の一人であった。

明治16年（1883）福岡県に生まれた眞藤は、頭山満らによる大アジア主義の政治結社・玄洋社に所属し、馬賊操縦を夢みていた。日露戦争では満州義軍に参加し負傷するが、戦争終結後、後にハルピン・モスクワ総領事から日魯漁業社長となる川上俊

彦の勧めで漁業家に転身していた。

大正14年（1925）眞藤は外務省囑託を命ぜられ日ソ漁業条約改訂会議に参加する。日ソ基本条約の調印により国交が回復し、旧ロシアとの露領漁業権の有効性が確認される。眞藤は翌年日魯漁業の取締役となり、昭和3年正月から缶詰附属漁区の長期租借契約交渉に携わり9月調印する。日魯の権益の拡大が得られ4年に常務、9年専務取締役に就任する。

日魯の本社は東京であったが事業部が置かれた函館は基地の町として大繁栄し日魯城下町の様相を呈する。一方でそれに対する反発もあった。

「島徳事件」を解決

日魯はソヴィエト領事の着任にあたり船見町のアメリカ領事館であった旧キング宅の「堤ハウス」を就任式と仮領事館として提供する。

また眞藤は昭和元年頃に船見町のイギリス商人ウィルソンの洋館跡地に別宅を建てる。幸坂の旧ロシア領事館の改修後、ソ連領事館のロシア人職員の家族らは坂向かいの路地を抜けて眞藤の別宅によく出入りし、洋館でダンスなどに興じたという。

眞藤を有名にしたのは昭和4年に発生した「島徳事件」を、玄洋社の人脈を使って解決したことである。これは、高額配当を実施する日魯の株式を買い占めるとともに、その経営権とソ連領カムチャッカの漁場権を奪おうとした乗っ取り事件で、背後には田中義一首相ら政財界の大物が見え隠れした。この大事件の解決後、堤清六は混

乱の責任を取って社長を辞任し、日魯は平塚と眞藤を中心とする複数指導体制となった。

近代漁業経営家としての顔

政治工作者の顔は眞藤のほんの一面であり、彼は世界の動きを冷静にみることが出来た近代的経営者であった。

柏野に修養道場を開設する一方で、サージの紺色の制服や七宝のバッジを定め自ら着用し事業本部長として率先し現場を激励した。本部船方式を採用し露領全域の管理を図った。カムチャッカの鮭鱒を露領の海岸漁区を使わずに自由な公海での流し網方式で沖取り漁業を始める。またソ連の国営漁場の強化に対抗し北千島の建網漁業に割り込むなど常に事業の伸張をはかり日魯会社の繁栄を招いた。

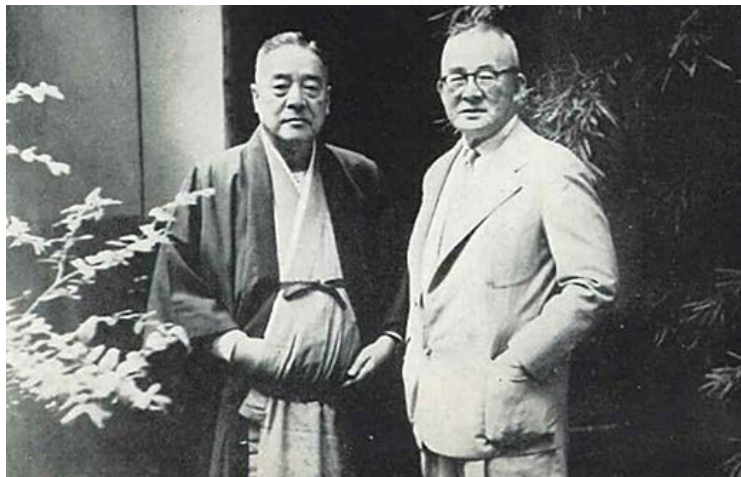
こうした日魯の事業は敗戦ですべて失われるが、世界一の漁業会社といわれた日魯の事業規模は昭和14年の実績からみると、

露領漁業・母船式漁業・北千島漁業を合わせ従業員4万2千人、使用船舶77万トン、生産高は1億2千万円であった。

終の棲家は太宰府の「自然庵」

昭和13年眞藤は日魯の副社長となるが、太平洋戦争の勃発で水産業界の冷凍事業部門が統合されることになり、その経営を引き受けるため会社を去る。17年に代議士を1期務め敗戦後に公職追放となり船見町の別宅で過ごした。

東京一と云われた名妓を妻とし復職後は事業家として再び活躍する。自由党総裁になる同郷の緒方竹虎との終生の交友は有名である。著書に『眞翁聞きかき』が残されているが多くは語らなかつた。戦後は蓬莱町の料亭松源を鼯^{ひいき}にし、タバコ好きで和服を上手に着こなすお洒落な男と伝えられる。引退後は太宰府天満宮隣に広大な庭を持つ「自然庵」を終の棲家とし、昭和46年正月89歳で波乱の人生を閉じた。〔清水〕



眞藤慎太郎（右）と緒方竹虎。昭和30年晩秋、箱根湯本・松の茶屋にて（朝日新聞社刊『緒方竹虎』より）

26 図書館人を支え続けた、北洋漁業の先駆・平出喜三郎

平出喜三郎（初代）、西出孫左衛門、久保彦助は、ともに石川県江沼郡橋立村の出身で、北前船で財をなしたことから、人々は「橋立の3人の分限者」と呼んで尊敬した。また久保の四男・彦十郎は平出家の養子となり、その2代目を継いでいる。

この2代目喜三郎は明治9年（1876）3月に橋立村で生まれた。来函して函館商業学校を卒業後、慶應義塾に学ぶ。卒業後は函館で海運業、漁業、鉱山業など幅広く事業を営む傍ら、区会議員を経て、明治45年、36歳で衆議院議員に当選した。

政界進出後も漁業家として意欲的で、近代的な母船式沖取漁業に先鞭をつけた。4年に1度の産卵期に故郷の河川に戻るという鮭鱒の習性から、その回遊ルートを把握すれば、他国の領海に出向かずとも公海（沖）で漁ができるというのが沖取漁業の考え方だが、喜三郎はさらに缶詰機械などの加工設備を搭載した母船を投入すれば、他国の沿岸に工場用地を借りる必要もなくなると考えたのだ。

昭和2年、自らその第1号として、母船2隻、加工設備8ラインを整え出漁する。結果は決して芳しいものではなかったが、これが後に言う北洋漁業（母船式鮭鱒漁）の原点となった。

喜三郎は実業家、政治家として知られるが、文化人としての顔も忘れてはならない。

明治45年には函館日日新聞社を買収して函館新聞を創刊。函館を代表する言論人



私立函館図書館創立当時の館長・泉孝三と書庫。右上の丸内が2代目館長の平出（北海道図書業先覚並功労者慰霊祭記念絵葉書）

でありながら、筆禍で刑を受けた長谷川淑夫（長谷川四兄弟の父）を主筆に迎えている。

また函館図書館が私立だった時代に2代目館長に就任。市立に移管される昭和3年（1928）までの長きにわたって在任した。その間、運営責任は自分が負いつつ、岡田健蔵に信頼をおき、図書館実務を一任した。図書館人・岡田（㊦参照）が能力を発揮できるよう、物心両面から陰で支えた功労者であった。〔千葉〕

【参考】函館市史・通説編3巻5編第2章

27 在函館ロシア領事 エヴゲーニ・フョードロヴィチ・レベデフ

1879年シベリアのイシムに生まれる。トボリスク神学校を卒業後、1900年10月ウラジオストクの東洋学院に入学し、日本語・中国語学科で学ぶ。卒業を2カ月後



最後のロシア領事レベデフ

に控え、日露戦争が開戦。当初は満州軍司令部野戦参謀付軍事通訳として遼陽に、続いて旅順に派遣され、旅順口要塞司令官ステッセル將軍付きの日本語通訳（陸軍二等大尉相当）を務めた。戦功に対しては、「聖アンナ三等勲章」および「剣付き聖スタニスラフ三等勲章」が授与された。

東洋学院卒業後は外交官の道を歩むことになる。明治39年（1906）3月末に東京のロシア公使館の「訳官見習」として妻アレクサンドラと来京。明治40年から大正元年（1912）までは大連総領事館の書記官となるが、最初の約3年間は、領事不在中の長崎および横浜の領事館に（臨時）事務代理として派遣された。

大正元年12月、在函館領事館の副領事として着任。当時の函館は露領漁業（後の北洋漁業）の基地で、多数の日本人出漁者が函館港からニコラエフスクやカムチャツカ方面へと向かった。函館の人達は、海外

旅行査証（ビザ）や船舶証明書など出漁関係の各種証明書を発給する権限を有するロシア領事との関係を非常に重視した。ところがレベデフは、日露戦争で自国を破った日本人に対して非常な敵愾心を抱くようになっていた。査証の発給をわざとじらすなど、漁業関係者に圧力をかけることも多々あった。

大正6年、本国ロシアで革命が勃発するが、レベデフは東京のアブリコソフ代理大使の庇護を受けながら函館の領事館に留った。しかし、大正14年1月、日ソ基本条約が締結され、日本政府がソヴィエト政権を正式に承認すると、ついに妻と2人の子どもを連れて函館を去ることになった。当時の新聞には、メキシコに亡命する、長男の暮らすアメリカに向かう、などと報じられたが、その後の消息については不明。

〔倉田〕

【参考】倉田有佳「エヴゲーニ・レベデフ（1879-19？東洋学院を卒業した函館領事レベデフ）」『ドラマチックロシア in japan III』



旧ロシア領事館

28 函館で育った本邦水産植物学の祖・遠藤吉三郎の背景と活躍

黒船がもたらしたもの

東京帝国大学植物学教室で学んだ宮部金吾、岡村金太郎、遠藤吉三郎は日本海藻学の祖と称される。宮部と岡村は初代教授の矢田部良吉の、遠藤は二代教授の松村任三の薫陶を受けたが、彼らを輩出したことによる本邦海藻学の確立と黒船来航には知られざる連続性があった。

ペリー艦隊（1854年）とロジャース艦隊（1854-1855年）は日本の動植物の採集も大きな目的として来航し、前者には植物学者モローと通訳ウィリアムスが、後者には植物学者ライトと海軍軍人兼植物採集者スモールが調査要員として同行していた。これはシーボルトらの報告で示されていた多様な日本植物と米国植物との類似性に着目した大学の要請によるものであり、アメリカは当時から自然科学研究に国家が協力するほど進歩的であった。採集された動植物の標本の内、植物はハーバード大学のグレイが、海藻はダブリン大学（アイルランド）のハーベイが研究した。ちなみに、函館で採集された新種の中で、ホタテは *Mizuhopecten yessoensis* と蝦夷を含む学名が付き、イトウ (*Hucho perryi*) と紅藻モロトイグサ (*Polysiphonia morrowi*) の学名にはペリーとモローの名前がそれぞれ用いられた。後日、これらの標本はハーバード大学やニューヨーク植物園などに保管された。

矢田部は、1876年ハーバード大学夏期講習に参加した折にファーロウ教授に海藻実験の指導を受け、しかもライトが採集した海藻標本の重複品を受取り日本へ持って



ジェームズ・モロー (A Scientist with Perry in Japan: The Journal of Dr. James Morrow, Cole AB ed., 1947, 口絵)

帰った。すなわち宮部と岡村による海藻研究は、矢田部を介した黒船標本の影響を受けていたのである。松村は矢田部の補佐を通して海藻研究にも造詣が深く、黒船標本の流れは遠藤にも受け継がれた。その後、宮部と遠藤は共に札幌農学校水産学教室の教授として成果を上げたので、現在北海道大学で展開されている世界的な海藻研究の源は黒船による海藻採集にあると言える。この意味で、函館が本邦海藻学の確立と発展に果たした役割は極めて大きい。

水産生物学と評論の二刀流だった 遠藤吉三郎

日本の食卓は遠藤の恩恵にあずかっている。板海苔の原材料は紅藻スサビノリ (*Pyropia yezoensis*) であるが、これは彼が住吉の海岸で発見したものであるからである。当時その辺りは尻沢辺と呼ばれており、土地の人々はスサビやシサビと発音

していたのでスサビノリと名付けられた。また、遠藤が函館で発見したウガノモク (*Stephanocystis hakodatensis*) の学名には函館の名前が含まれている。

このような遠藤と函館の密接な関係は、実家が函館にあったことで築かれていた。新潟出身の父・吉平は、1878年「函館共同商会」を設立して函館に遠藤吉平商店を構えた。1884年小学4年生の遠藤も函館に移り、弥生小学校や函館商業学校で学んだ。また、吉平は北海道共同商会や函館商工会の設立に携わり、1908年には旧函館県選出の衆議院議員となった。このような父に生涯頭が上がりなかつた遠藤であるが、函館とは強い絆で結ばれていた。

「実験隠花植物学」(1906年)や「水産植物学」(1911年)などを発表した遠藤は、本邦水産植物学の祖とされる。彼は熱心に学生指導を行う反面、ストレートな表現で権力に立ち向う激しさを持っていた。例えば、ノルウェー留学時に習得した語学力により、森鷗外によるイプセン戯曲の翻訳中の誤訳を指摘し臍茶の極みと批判した。このとき「尻澤(沢) ^{へそちや} 辺布刈」と名乗っており(布刈はワカメ)、遠藤の函館への思いが覗かれる。また、2本杖ノルディック・スキーを日本へ導入し、ジャンプ台を初めて作った。一方、留学したことにより国粹主義傾向が強化されたせいか、西洋化批判の「西洋中毒」(1916年)を著し、通常は和服で通した。さらに、先輩の岡村をライバル視し、学会誌上で論争を展開した。1919年には、随筆「僕の家」を北海タイムスに載せ、これが大学当局に誹謗ととら



遠藤吉三郎(北海道大学理学部旧植物分類学教室蔵)

えられて休職処分を受けた。これに対し学生の処分撤回運動が自殺未遂者を出すまでに発展し、国会でも問題となった。このような個性的で波乱に満ちた生涯は、1921年肺結核により休職のまま47歳の若さで閉じられた。 [三上]

【参考】「黒船が採集した箱館の植物標本里帰り展」図録(1995年・アド北海道)、水産植物学者 遠藤吉三郎先生 採集と飼育 42巻(浜田稔・1980年)

29 小樽築港で不動の評価を確立した廣井勇、函館での仕事

函館漁港の船入澗防波堤は、明治29年(1896)に着工した。旧弁天台場の石材が再利用されたことはよく知られるが、その基礎には、日本人製作のコンクリートブロック558個が使用されている。当時海洋土木へのコンクリート適用は未知数の時代で、明治20年代半ば、外国人技師の指揮で行われた横浜築港では、海中に沈めたコンクリートブロックにただならぬ亀裂が入るといった事件が起きていた。

工事を監督・指揮した廣井勇はこの失敗を踏まえ、成分の異なるセメントと異なる材料で幾種ものコンクリートブロックを製作し、実際に海に投入して経過を観察するなど、周到かつ厳密な試験を実施した上で現場に臨んだ。工事の前に「函館港湾調査」が実施されているが、調査報告文の3分の2が、その「セメント及びコンクリート試験」で占められている程である。

明治32年、船入澗防波堤はつつがなく竣工。北海道で初の近代港湾施設である。

今も防波堤として機能しており、平成16年(2004)度「土木学会推奨土木遺産」に認定されている。

堤頂部に破損や崩落が見られ、平成23年より復元工事が行われたが、基本構造は強固に保たれ、ブロックも打設面が浸食されず残っていたため、ほぼ上2段の石積を積み直すにとどまり、当時の設計思想や技術力を後世に伝えることに重きが置かれた。

文久2年(1862)、土佐藩御納戸役の家に生まれた廣井は、父の早世後10歳で上京、叔父宅の玄関番として働きながら、当時最難関だった東京外国語学校英語科に12歳の最年少で入学する。さらに工部大学校予科(東大の前身)に進学するが、学費の関係で中退し、明治10年、札幌農学校に2期生として入学した。卒業後は開拓使、工部省に奉職。明治16年から自費でアメリカ、ドイツに6年間留学し、橋梁工学、土木工学を学んだ。

廣井を有名にしたのは明治30年着工の小樽港北防波堤工事で、これにより日本の近代港湾建設技術を確立したと高く評価されるが、廣井はむしろ、その前哨戦とも言える函館の船入澗防波堤工事で、自らの技術に確信を得たのではなかろうか。 [千葉]

【参考】函館漁港船入澗防波堤復元工事について(北海道開発局 函館開発建設部)



廣井の哲学を尊重して修復された船入澗防波堤

写真に芸術性を求めた初代治重

文政10年(1827)、相馬中村藩の重臣の家系に生まれた紺野治重は、安政2年(1855)に江戸詰となり、ペリー来航を機とする激動の時代の渦中を過ごしている。新しい文化である写真に関しても、一橋慶喜、尾張藩主徳川慶勝よしかつ、藩主松前崇広たかひろらの下で研究がなされ、治重も相馬藩主の妹が松前崇広に嫁した関係から、大いに関心をもったと思われる。

治重は御金奉行、江戸玄米奉行、勘定奉行を歴任するが、文久2年(1862)、箱館に渡る。明治5年(1872)、開拓使より北海道開拓状況の撮影記録の依頼を受けたスティルフリードの随員として、開拓少主典に任ぜられた。また治重は、新都札幌の建設状況の撮影記録にあっていた田本研造に、入手困難だった写真薬品類を開拓使備品より供与したと記録されている。任務の中で写真術を習得した治重は、以後も北海道開拓状況の写真を東京へ送付するという業務を継続した。

明治8年に退官後、恵比須町(現末広町)で写真師として独立し、明治14年の函館新聞に「写真舗 素彩堂 紺野」の開店広告が見られる。「写真=真を写すもの」とされていた写真の黎明期にあって、「素を彩る」という芸術性に思いを込めた先見性が伺われる。

ハイカラ 高襟番付「前頭」に列した2代松次郎

治重の子は娘1人だったため、素彩堂は弟の子・松次郎が引き継ぐ。慶応元年(1865)生まれの松次郎は、函館医学所(当

時の函館病院に併設された医学校)で基礎医学を修め、横浜で薬学を学ぶ。治重より写真術を受け継ぐが、明治23年4月、函館薬劑師こやしの嚆矢として大町で薬局を開き、劇薬や写真用薬品の販売を行ったほか町会長を務めるなど多忙を極めた。

そのため妻チカに写真術を教え写真館を任せたとはいえないが、田本研造の葬儀では松次郎が写真師会を代表して弔辞を読み上げている。写真館主であり西洋の薬学に通じたことから、明治34年8月の北海朝日新聞「高襟番付」では前頭に列している。

函館商船学校の記録を残した3代孝造

3代目孝造は明治25年新潟県に生まれ、札幌や小樽の写真館で修業を積んだ後、素彩堂の技師となり、松次郎の娘フサと結婚する。

現像後の水洗を重視した孝造の写真は変色が少なく、ガラス張りの屋根からの自然光とストロボ光を融和させた調光や、書き割りによる背景づくりで作品的にも優れた写真を撮影したが、特筆すべきは、北海道庁立函館商船学校の最後の卒業アルバムを制作したことである。

明治12年設立の私立商船学校以来の歴史をもつ函館商船学校では、質の高い船員教育が行われ、連絡船要員ほか海の男たちを育ててきた。ところが、昭和に入り海運界が戦争に巻き込まれる中、民間所有の船舶の多くが徴用され、同校も昭和10年(1935)廃校となる。

孝造は同校の貴重な記録を残すべく最後の卒業アルバムの制作に心血を注ぐ。卒業

生の安否も気に向け、アルバムが家族縁者の心の支えになるようにとの思いも込めた。

函館と横浜を結ぶ絆に

孝造は筆者の父であるが、没後、筆者はその遺志を汲み取り、函館市中央図書館にアルバム1部を寄贈した。先年、横浜から函館に入港した「海王丸」にアルバムのコピーを持参し、船長に孝造の思いを話したところ、船長より一般社団法人全日本船舶職員協会（全船協）に話が伝わり、そのホームページでアルバムが公開される運びとなった。

商船学校廃校後、施設・設備の一切は、北海道庁立函館水産学校（現北海道函館水産高等学校）に継承される。同校と全船協にも深い縁があり、昭和56年に全船協が創立50周年を迎えた際、函館商船学校が机上操帆訓練用に使用していた模型帆船「北光丸」が、函館水産高等学校より全船協に譲渡されている。長さ6メートル超の「北光丸」は、教材用模型帆船として世界有数の大きさである。

模型は全船協で補修され、横浜帆船模型同好会により艀装された後、社団法人横浜港振興協会に寄贈され、横浜港大棧橋国際客船ターミナルに展示されている。また平



大正8年頃の紺野写真館

成25年、同ターミナルにおいて、函館水産高等学校の修学旅行生が、商船学校時代の校歌の名句を現在の校歌に組み入れた「海の絆」を披露している。

函館商船学校の遺産が、函館と横浜、全船協を結ぶ絆となり、孝造もさぞかし安堵しているだろう。〔田村〕

31 函館の誇る近代図書館の父・岡田健蔵

西洋ローソクの改良が出発点、 自宅に図書館を開設する

岡田健蔵は明治16年(1883)、現入舟町にて生まれ、小学校卒業後、商店に勤めたが、明治36年3月店を辞めて、自宅で西洋ローソクの製造、販売を始めた。

持ち前の研究心からローソクの改良を試みるが、資料が皆無ということが分かった。それで図書の収集、図書館の必要を痛感して行動を開始した。明治39年当時文芸愛好者で組織する函毎(函館毎日新聞)緑叢会に入会し、図書館設置を提唱、設立委員となる。明治40年自分の蔵書及び函館毎日新聞寄贈の図書を中心に、自宅に図書室を開設して、無料公開したが、利用者は少なかった。

同年8月大火により、店舗、住宅、図書室すべてを焼失する。

明治41年彼は再建を決意、自費で東北

東京の図書館を視察。その間日本図書館協会北海道の第1号会員となる。視察報告を兼ね図書館設置委員会を開き、発起人65人の賛同を得て、店舗、住宅を復旧し、ローソクの製造を開始する。

明治42年900円の寄付を受け、公園内の協同館*の借用が許可され、私立函館図書館を開館する。館長泉孝三、副館長工藤忠平、岡田は主事。

明治45年、岡田は店を閉めて、谷地頭に移住。イネと結婚、夫婦で協同館*に住み、図書館運営に専念する。

*協同館とは函館区所有のゲストハウス・集会場。当初は現東本願寺函館別院地にあったが、明治12年の大火後、函館公園内に移設

市立図書館完成、やがて館長に就任

大正2年(1913)、有力者相馬哲平の協力を得て、函館公園内に書庫を建設する。本道最初の鉄筋コンクリート建造物である。

岡田は多年の資料収集により、資産を殆ど失い生活に窮したが、2代目平出喜三郎の援助で何とかやりくりをする。この間男の子ども3人を失う。

大正15年図書館の完成を期して、市会議員に立候補、再選を果たす。

昭和2年(1927)、念願の図書館完成。昭和3年、市立函館図書館開館式を挙行、昭和5年図書館長に就任。



函館公園内に建物が残る旧市立函館図書館

先見の明と郷土資料収集の情熱

昭和9年の大火が発生、函館公園にも火は回って来たが、書庫がコンクリート造りであったので焼失は免れ、多くの資料が救われた。

これは前の火事の苦い経験で、周囲の反対を押し切って金は掛かっても不燃性建物にした岡田の先見の明によるものである。

その後、岡田はますます図書館の充実に力を注ぎ、特に郷土資料目録が送られてくると、直ちに電報を打ち注文をする。北大などが申し込んだ時はすでに手遅れであった。そして予約してから、寄付集めに走り

回っていたとの事。

しかし、市民の中には、「古い本ばかり集めて、現代の書物はあまり買わない。」との批難の声を上げる者もいた。

昭和18年、肺病のため中央病院に入院、19年12月、62歳で永眠。葬儀は、図書館閲覧室で施行された。

なお、岡田は郷土資料ばかりでなく、絵葉書の収集にも興味を持ち、そのコレクションは3万枚に及ぶ。現在中央図書館で分類整理中である。 [中嶋]

【参考】岡田健蔵伝(坂本竜三著・講談社出版サービスセンター)

“北日本が生んだ稀有の図書館人”にまつわるエピソード

1 「オイ、小僧、これ負からんか」
「20銭です。負かりません」

お客は買わずに店を出て行った。

それを見ていた店の主人は言った。

「オイ、健蔵、そういう時は25銭と言うんだぞ。それが商売のコツだ」

「それじゃペテンでいんちきだ」と健蔵は思い、それから店へ出ないで土蔵の掃除ばかりをしていた。

これが小学校卒業後小僧の頃の健蔵である。曲がったことが嫌いで、不正を許さず、頑固な性格を見て取れる。

2 健蔵は、妻や子に、「早く逃げろ。家はオレが守るから」と言った。昭和9年3月の大火の時である。

火は風に煽られて、協同館にも迫ってきた。健蔵は水に浸した毛布をもって、住居と図書

館の境目に張り付いた。やがて火は通り過ぎ、不燃コンクリートの図書館は焼け残った。岡田が懸命に集めた貴重な郷土資料も生き残り、現在の郷土史研究に役立つこと大。

3 チリーン、チリリン「〇〇書店です。北大図書館ですか、毎度有難うございます。エーその本は売れました。買ったのは函館図書館です」

健蔵は、資料目録が送られてくると、すぐに電報を打ち、予約した。上京の際は古書店を巡り、郷土資料を見つけると、予約して言った。「すぐ函館へ帰り、寄付を集めなくちゃ」—東遊蝦夷地歴遊日記750円也。この時は、御茶屋の女将が出してくれたそうである。健蔵の月給50円の時代である。函館図書館は殆ど健蔵の一存で自由に本を買えた(らしい)。

さまざまな人と文化が交錯した函館の街

本編⑳㉑でも触れているが、函館はそれまで邪教とされてきたキリスト教をいち早く受容した街である。それは開港場となって以降、市中に居留した西欧人宣教師などの伝道活動に端を発する。彼らが基礎を築いた教会群は今や貴重な観光資源にもなっているが、教会の内部には「イエス殺害はユダヤ人によるもの」という当時の彼らの恣意的な主張の痕跡が温存されている。

一方、蝦夷地に先住した民族であるアイヌの人々について、「明治以降函館にはいない」とするのが「公式」の見解であった。だが本編㉑ではそれに対する「北海道アイヌ協会函館支部」からの反論を紹介した。

いつの時代も為政者や権威者の見解や施策と、民や当事者たちの思いや暮らしとは、隔たりがあるものかもしれない。真実を突きとめるのは容易なことではないにせよ、さまざまな人や文化が交錯した函館、そして北海道には、陽の当たらなかつた歴史を見つめ直す材料が数多く残されている。

32 カトリック元町教会十字架の道行の謎



左の写真をご覧頂きたい。これはカトリック元町教会の聖堂内部の壁に沿ってぐるりと設置されている「十字架の道行」と呼ばれる14の彫像の一つである。カトリック教会の聖堂

ならどこでもあるものだが、これほど精緻なものでは日本では多分ここだけだろう。最近の聖堂では簡略化した象徴的な彫刻などで済ませているところが多い。

私は幼い頃からこれを見る度に言いようのない違和感を感じていた。手前のユダヤ人とイエスは理解できるが、後ろの鉄兜を被った色白のおじさんたちは（こんな狭い所に）何故登場し、しかも知らんぷりしているのだろう……。

平成16年（2004）の夏、私は妻とともにフランスのルルドを訪れた。この山の中に等身大の立体彫刻による十字架の道行があると聞き訪れてみた。右がその時写した写真である。これを見て私は混乱した。元町教会の道行のせいで、イエスを十字架につけた下手人はユダヤ人とばかり

り思っていたのだがここではローマ人となっているではないか。どちらが正しいのだろうか？

帰国してから、聖書の該当する部分を読んでみるが今ひとつはつきりしない。制作について調べると、元町のは大正13年（1924）以前のイタリア製、ルルドのは昭和33年（1958）のフランス製と分かった。調査していくうちにここに教会の歴史の暗い闇が潜んでいた事が分かった。紙面が無いので端的に結論を述べる。

元町教会のものは、直接の加害責任をユダヤ人に押し付け、ローマ兵は単に警備をしていただけという事を印象付けるための道具立てだったのだ。欧州では歴史的にそう信じ込んだ教会・信者も多く彼らはユダヤ人の迫害へと走った。しかし、第二次大戦後から教会内部での見直しが進み、ついには第2バチカン公会議で「イエスを殺したのはユダヤ人ではない」と宣言するに至



る(昭和40年)が、そのような機運の中ルルドの道行が作られたのだった。なお、直接の下手人がどの民族か聖書の中で明確に書かれていない事については、ローマ帝国がキリスト教を国教とする際、イエスの磔^{はりつけ}に対するローマの関与を軽くするよう福音書に手が加えられたと主張する学者もいる事が分かった。

参考

十字架の道行の最初の彫刻であるが、後ろの小さな像はピラトが「この者は私に関係ない、(お前たちユダヤ人が責任を取れ)」(聖書から要旨を意識)と言って手を洗っているところである。

周到に、ローマが関与していない事をPRしている。昔のヨーロッパでは字を読めない人も多く、そんな人達の教育はこのような像を用いて行われた。幼かった私もこれで教育を受けたのだった。[小原雅夫・画家]



33 歴史に翻弄された人々

平成25年(2013)初秋、渡辺謙主演の「許されざる者」の上映があった。これは、クリント・イーストウッド監督の同名映画を日本版にリメイクしたもので、明治初期の北海道を舞台に幕府軍残党の主人公が、子供のために錆びた日本刀を身に帯び、賞金稼ぎの戦いに向かうという物語であった。

同作品は「アイヌ語で会話する場面など、アイヌの人々の描写が話題を集めた」と報じられ(平成25年10月19日付北海道新聞)、又同紙上で李相日監督は「北海道の開拓、繁栄の影にアイヌ民族がいて、--- 彼らの価値観、歴史を多数である側が許容できなかつた事実を知る必要があると思った」とコメントしている。

江戸幕府から開拓使に持越された樺太の領有権問題は、明治8年(1875)、樺太・千島交換条約で確定。交渉官は榎本武揚駐露特命全権公使で、樺太全島をロシア領、千島列島の18島は日本領とした。

これに伴い、樺太アイヌ2千数百人中108戸841人は宗谷に移住、翌年石狩国対雁(江別市)に強制移住させられた。環境の激変で死亡者も続出し、日露戦争後の南樺太領有で、対雁移住アイヌの残留者395人は樺太に帰還した。千島

アイヌ97人は、明治17年、色丹島に強制移住。慣れぬ生活に人口も減少した。太平洋戦争末期、この地からも追われ、北海道に強制移住させられ四散した。

「近代化」という美称が歴史の必然であるとしても、受難の歴史を刻んできたアイヌの人々にとって、「多数である側」(前述の李監督の弁)の末裔の私達に比し、等価でなく、むしろ嘆きの言葉では、と思われる。

[三国谷]

【参考】アイヌ民族と日本の歴史(宮島利光)、北海道の歴史(榎本守恵)、県史1 北海道の歴史(田端宏他)、北海道史略年表(北海道立文書館)



明治初期のアイヌ風俗絵巻(西川北洋)より









人物編縁の地ガイドマップ

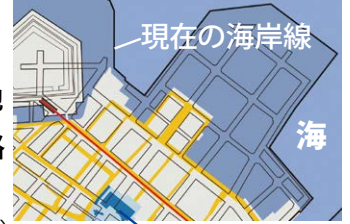
『箱館から函館へ（富原章）』収録の明治9年地図を参考に、外国人居留地や主要な建物を明示した往時の函館地図を再現し、そこに現在の函館地図を重ね合わせた居留地ガイドマップです。明治9年地図は明治11年・12年の各大火後の街路整理が行われる以前のもので、幕末から明治初期まで連続と続き、開港の舞台となった函館の街並を伝えています。道路や海岸線の移り変わりにも興味深いものがあります。本編に登場する縁の地も示しています（文章の番号と図中の丸数字が対応しています）。散策や探訪にご利用ください。〔清水〕



- ① -1 高田屋敷跡、2 高田屋嘉兵衛像、3 高田屋本店跡、4 高田屋の造船所 ② 工業松右衛門の築島跡
 ③ 沖の口番所跡 ④ ロシア領事館（元町）跡 ⑥ アメリカ領事館跡 ⑦ -1 箱館医学所跡、2 宝小学校跡
 ⑧ -1 高龍寺跡、2 実行寺跡、3 称名寺跡、4 浄玄寺跡、5 旧山背泊地藏堂、6 旧願乗寺 ⑨
 小嶋家の墓 ⑩ 諸術調所跡 ⑪ 箱館奉行所跡 ⑫ ポーターの居宅跡 ⑬ クリスマスツリーの大町カ子セン跡
 ⑭ 忠次郎の芝居小屋跡 ⑮ 函館八幡宮跡 ⑯ ワチガイ酒谷商店跡 ⑰ ブラキストンの居宅跡 ⑱
 旧太刀川商店 ⑲ 箱館丸 ⑳ 正教女学校跡 ㉑ -1 ポルトガル領事館跡（谷地頭）、2 ポルトガル領事館跡（船見町）
 ㉒ 旧丸大松橋商店 ㉓ 雑賀重村の墓 ㉔ 遺愛女学校跡 ㉕ -1 日魯漁業事業本部ビル跡、2 旧眞藤慎太郎宅
 ㉖ 旧市立函館図書館 ㉗ 旧ロシア・旧ソヴィエト領事館 ㉘ 旧遠藤吉平・共同商会 ㉙ 函館漁港船入潤防波堤
 ㉚ 紺野写真館跡 ㉛ 協同館跡・旧市立函館図書館 ㉜ カトリック元町教会

凡例

-  明治9年の陸地
-  明治9年の道路
-  現在の道路
-  市電路線（現在）
-  外国人墓地（明治9年頃）
-  外国人居留地跡（埋立・設定当初国有地）
-  外国人居留地跡（国有地）
-  外国人居留地跡（民間所有地相対貸）



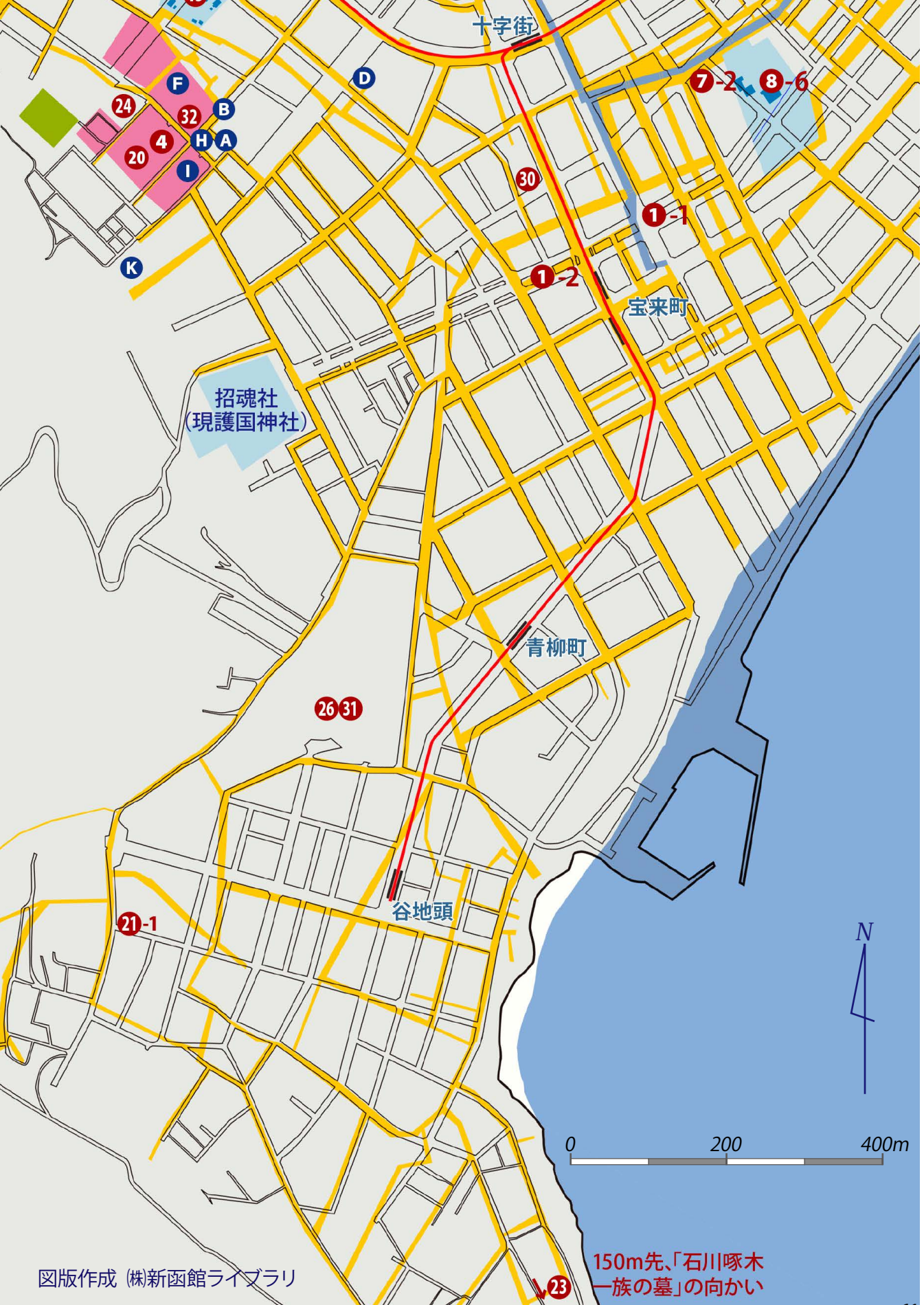
長谷川^{しゅん}澹の見た函館のエトランゼ

函館は早くから^{エトランゼ}異邦人が住みついた町でもありました。『街並・文化編』でも紹介した長谷川四兄弟の三男澹は、大正から昭和初期の函館にいた英・米・仏・露・中の異邦人を詠み込んだ詩や散文を残しています。澹の名作『木靴^{サボ}をはいて』(写真熊谷孝太郎)から象徴的なフレーズを引用し、読まれた場所を地図に示しました。澹の見た異邦人の姿に、思いを馳せてみませんか。〔清水〕
※原文ママ、注釈〔*〕清水



発行：函館フォトアーカイブス

- A 木靴をはいて—ふるさとの小路で—〔* 修道院の〕無言道士がけずっていたサボ…私は木靴をはいて春の小路を行くポクポクポク。
- B 坂のある港町、ロシア寺院の鐘が鳴りフランスの尼さんの白い帽子と黒い服。
- C 〔* キングの領事館〕弥生坂のてっぺんのでっぺん—つまり七面山のわきに、米国領事館があった。木造の二階建てで異国的な西洋館。
- D 五島軒界限、バタのやける匂、牛乳、香料 コック帽と白いエプロン、肉の塊、玉葱。
- E 〔* 仲濱町旧外国人居留地〕又十〔* 藤野〕の倉庫で、なまこをむしろ一杯に干していた。いりこだ。中華料理の材料である。…すると倉庫から一人の中国人がとび出して弟の手首をむんずと叫んだ。「ナワデシバルー」
- F 〔* カトリック教会〕ふり返るとフランス人神父が立っていた。「あれはルルドの洞窟です」と日本語で教えてくれた。
- G 英国軍艦入港 港町のカフェにユニオンジャックひるがえり…灯の下 女の笑い 嬌声、悲鳴、哄笑。
- H 元町乗源寺(別院)の上に小さな私の家が坂道の処にあり。
- I 西洋館…聖公会の牧師ラングの住宅…はじめて外国人の手によるケーキを一片か二片たべて、そのバターと牛乳の香りにふっくらした味を私は忘れられなかった。
- J 「しんめいさん(山上大神宮のこと)のある坂の上の方に赤煉瓦の二階建て西洋館…ロシア領事館。…ペンスネー「鼻眼鏡」をかけたいそがしげにいつも一人で歩く人一名前をレベデフと云った。
- K 二階のベランダに白いひげのスコットさん(山パッパ)が望遠鏡で海を見ていた。
- L 中華会館、年に一度位…うす暗い奥が見られた。そこには豚が丸ごと供えられ…中国人が立ったり、礼拝したり、煙がたちこめて、ドラの音が鳴りひびいたりした。彼等の祭らしい。



CONTENTS

1. 箱館開港と蝦夷地開拓。激動の時代を乗り越えた先人たち	1
1 前幕領期の箱館における高田屋の活躍	4
2 海洋技術のマルチタレント工楽松右衛門	6
3 箱館・沖の口番所のごロヴニン釈放：陰の立役者荒尾但馬守	8
4 ロシア軍艦対馬侵攻事件と箱館領事ゴシケビッチ	9
5 江戸幕府の合議による開国プログラムと箱館	10
6 ライスが後押しする下田のハリスの居留権交渉	12
7 蝦夷地と箱館のアイヌの戸口	14
8 箱館奉行堀利熙による蝦夷地の寺院建立	15
9 ペリー艦隊の「買いもの」と箱館の人々 ～小嶋又次郎『垂墨利加一条写』の視点	16
10 箱館諸術調所と長州ファイブ	17
11 〈コラム〉掃苔紀行—有能だった3人の箱館奉行の墓碑を訪ねる	18
12 イギリス商人ポーター～函館と30年余を共にした盛衰	20
13 〈コラム〉ゴシケビッチが箱館で立てた日本最初のクリスマスツリー	21
2. 奉行所から開拓使へ。近代函館を拓いた先駆者たち	22
14 享和から明治までの代々の「忠次郎」	26
15 菊池重賢と北海道の神仏判然令	27
16 二つの故郷を持つ商人	29
17 函館が先導した日本の博物学黎明期	31
18 函館のまちづくりに貢献した旧幕臣—井深基	32
19 箱館・函館に影響を与えた、下北半島ゆかりの逸材	33
20 酒井糸い—最初のハリストス正教会女性信徒	35
21 函館山東西麓のポルトガル領事ハウエル	37
22 家作から見る明治の函館商人	39
23 幕末維新を駆け抜けた男—雑賀重村	41
24 遺愛女学校初代舎監・函館婦人矯風会の創設—雑賀アサ	42
3. 北洋の進展、函館の繁栄。悲喜こもごもの人間模様	43
25 政治結社出身の漁業家・眞藤慎太郎の生涯	45
26 図書館人を支え続けた、北洋漁業の先駆・平出喜三郎	47
27 在函館ロシア領事 エヴゲーニ・フォードロヴィチ・レベデフ	48
28 函館で育った本邦水産植物学の祖・遠藤吉三郎の背景と活躍	49
29 小樽築港で不動の評価を確立した廣井勇、函館での仕事	51
30 開拓の記録に携わり、戦中の歴史も今に伝える 「素彩堂 紺野写真館」3代の写真師	52
31 函館の誇る近代図書館の父・岡田健蔵	54
さまざまな人と文化が交錯した函館の街	56
32 〈コラム〉カトリック元町教会十字架の道行の謎	56
33 〈コラム〉歴史に翻弄された人々	57
人物編縁の地ガイドマップ	58

はこだてと 外国人居留地

人物編 —官から商人の街へ—

はこだて外国人居留地研究会(代表:岸甫一)
平成26(2014)年3月31日発行

